ISSN-2186-8794

明治学院歴史資料館資料集

第10集②

ウィリアム・グリフィスと
米国長老教会女性海外伝道協会

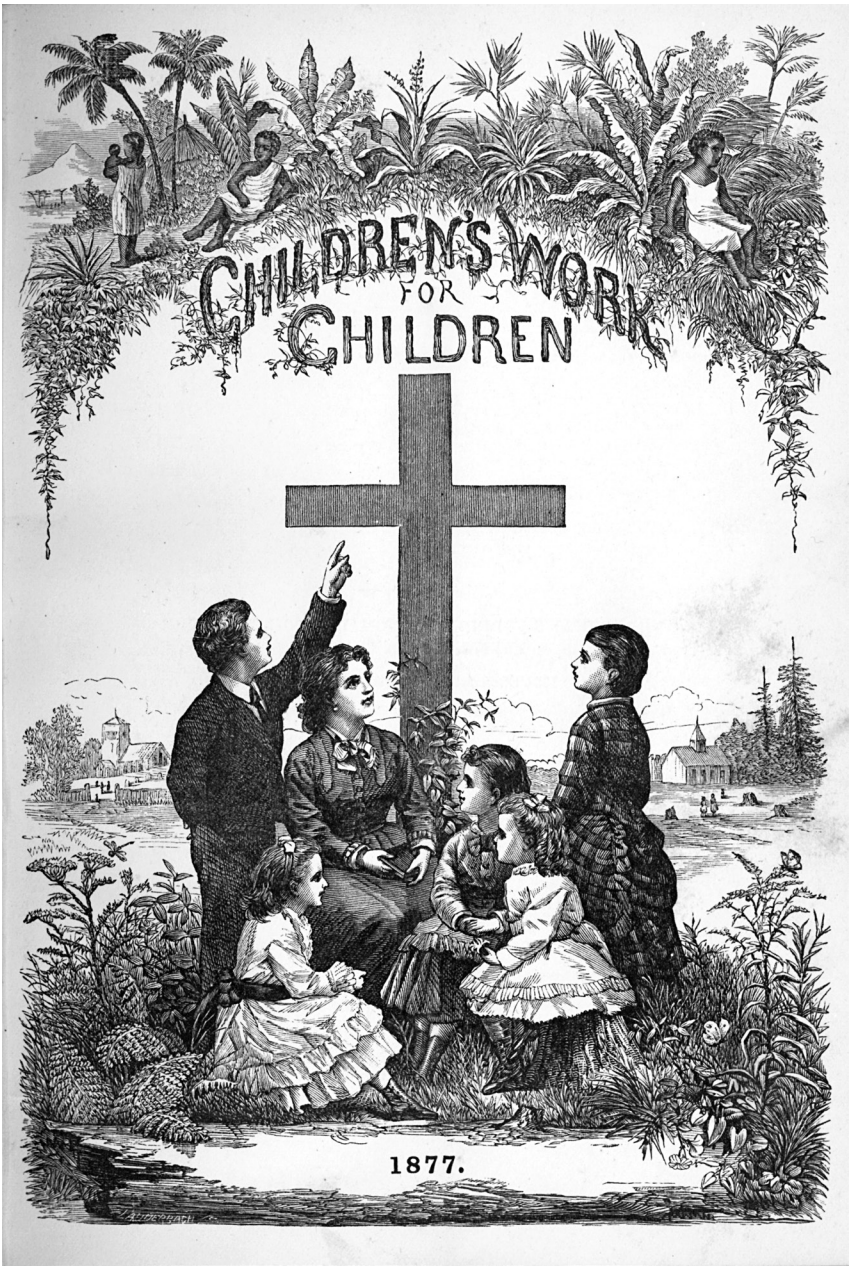
The Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church

William Elliot Griffis

"Children's Works for Children,1878" より

明治学院歴史資料館

【*Children's Work for Children* より】



Children's Work for Children, 1877 表紙

【*Children's Work for Children* より】

READ TO SLEEP.

BY MARGARET J. PRESTON.

For threescore years and ten,
Burdened with care and woe,
She has travelled the weary ways of men,
And she's tired,—and wants to go.

It has been so hard to live!
And even her stinted store,
It seemed as if fate had grudged to give,
And she wishes her need was o'er.

So musing, one afternoon,
Her knitting upon her lap,
She hears at her door a drift of tune,
And a quick, familiar tap.

In flashes a child's fresh face,
And with voice, bird-like and gay,
She asks,—"Shall I find a pretty place,
And read you a Psalm to-day?"

"Aye, read me a Psalm: *The Lord*
Is my Shepherd:—soft, not fast;
Then turn the leaves of the Holy Word,
Till you come to the very last,—

"Where it tells of the wondrous walls
Of jacinth and sapphire stone;
And the shine of the crystal light that falls
In rainbows about the Throne;—

"Where there never are any tears,
(Find where the verse so saith;)
Nor sorrow nor crying through all God's years,
Nor hunger, nor cold, nor death:

"Of the city whose streets are gold:
Ah, *here*, it was not my share
One single piece in my hands to hold,—
But my feet shall tread on it *there!*

"Yes, read of it all; it lifts
My soul up into the light;
And I look straight through the leaden rifts,
To the land where there's no more night."

So the little reader read
Till the slow-going needles stopped;
And then as she saw the weary head
On the wearier breast had dropped,—

Rising, she nearer stepped;
—How easy it all had been!—
The gates had unclosed as the sleeper slept,
And an angel had drawn her in!

LEXINGTON, VA.

【*Children's Work for Children* より】

詩人マーガレット・プレストン（Margaret J. Preston）による
「おやすみ前の読書」（“Read to Sleep”）と題する詩とその挿絵。
プレストンの父親は米国長老教会の牧師であった。

【*Children's Work for Children* より】

CHRISTMAS GREENS.

HERE'S cedar for Christmas, lady,
All fresh and bright;
Here's a mistletoe-bough with berries
Pure, waxen, white:
Here are clusters of scarlet hawthorn
These leaves beneath;
There's nothing can better brighten
A Christmas wreath.
They'll gleam, in the eyes of the children,
Like any gem:
I wish I could see the ruby
That outshines *them!*
You ask for a sprig of holly,—
Bless you, you know
That darling of English Christmas
Can never grow
Where feet are as cold as mine are!
But take, instead,
These branches of mountain laurel;
They'll crown some head
Of marble upon your bracket
As well, maybe,
As if they had grown in Devon,
Across the sea.
And here are some hardy flowers—
Chrysanthemums—
I think there's nothing as cheery
To market comes.
Make haste, if you please, dear lady,
For see, the snow
Is turning my greens to feathers,
And I must go.

MARGARET J. PRESTON.

LEXINGTON, VIRGINIA.

【*Children's Work for Children* より】

詩人マーガレット・プレストン（Margaret J. Preston）による
「クリスマスの木々」（“Christmas Greens”）と題する詩とその挿絵。

【*Children's Work for Children* より】

Children's Work for Children を読むアメリカの子どもたち

明治学院歴史資料館資料集
第10集②

ウィリアム・グリフィスと
米国長老教会女性海外伝道協会

The Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church

William Elliot Griffis

目　次

図版・*Children's Work for Children* より

訳者解説（明治学院歴史資料館研究調査員・齋藤元子）…… 4

***Children's Work for Children*, 1876-1882**

1876 年 8 月「家庭における日本の父親」…… 8
1876 年 9 月「日本帝国」……11
1876 年 9 月「日本の宗教」……18
1876 年 9 月「日本のピアノ」……24
1876 年 11 月「日本の旅」……28
1877 年 8 月「ミカドの宮廷音楽隊」……33
1878 年 2 月「日本の医者」……41
1878 年 6 月「日本の巡礼者」……47
1879 年 1 月「紅をさす日本の少女」……53
1881 年 9 月「日本の子どもたちとその日常」……58
1882 年 3 月「日本の乳児の命名」……66
1882 年 9 月「日本の骨董店」……70

訳者注……74

訳者解説

明治学院歴史資料館研究調査員　齋藤元子

昨年度刊行の明治学院歴史資料館資料集第10集①『バラ学校を支えた二人の女性　－ミセス・バラとミス・マーシュの書簡－』に続き、本書も明治学院の設立母体の一つである米国長老教会の中に設立された女性海外伝道協会（The Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church）の活動に着目する。

本書において訳出するのは、米国長老教会女性海外伝道協会発行の子ども向け機関誌 *Children's Work for Children* に掲載されたウィリアム・グリフィス（William Elliot Griffis）による日本紹介記事である。

グリフィスは、1870（明治3）年に来日し、福井藩の藩校明倫校や東京大学の前身である大学南校で教鞭をとった。1874（明治7）年に帰国した後は、牧師となった。日本に関する多くの著作を残し、*The Mikado's Empire*（1876）は特に有名である。また、フルベッキ、ヘボン、ブラウンの伝記著者として、明治学院との関係は深い。

グリフィスの著作に関する研究は既にかなりの蓄積がある。しかし、グリフィスが女性海外伝道協会の活動に関心を寄せ、機関誌に寄稿していた事実に言及したものはほとんどない※。

本書で翻訳を試みたグリフィスの記事は、1876年から1882年発行の *Children's Work for Children* に掲載されたもので、まさに *The Mikado's Empire* の出版と同じ時期にスタートしている。資料集第10集①にも記したが、*Children's Work for Children* は、米国長老教会女性海外伝道協会により、将来の宣教師育成と子どもたちからの小額献金の喚起を目的として、1876年に創刊された。つまり、グリフィスは創刊の年から寄稿を開始し、読者であるアメリカの子どもたちに伝道地日本の歴史や地理、文化、日常の様子などを解りやすい読み物として提供することによって、女性海外伝道協会の活動を支援したのである。

グリフィスの代表作 *The Mikado's Empire* が大人向けの書物であった

のに対して、*Children's Work for Children* に掲載された読み物は子どもを対象に書かれている。よって、文章は平易である。また、アメリカとの比較などを用いて、日本のユニークさを解りやすく説明している。さらに、記事には版画の挿絵が常に添えられており、それを解説する形で、視覚的にもインパクトのある文章が綴られている。

トピックは多彩である。「家庭における日本の父親」・「日本帝国」・「日本の宗教」・「日本のピアノ」・「日本の旅」・「ミカドの宮廷音楽隊」・「日本の医者」・「日本の巡礼者」・「紅をさす日本の少女」・「日本の子どもたちとその日常」・「日本の乳児の命名」・「日本の骨董店」・・・と訳出した記事のタイトルを並べただけでも、さまざまな話題が取り上げられていることが解る。

グリフィスは日本古来の伝統文化や芸術を高く評価し、それらが西欧文化に取って代わられることを危惧していた。「日本人は年々古い習慣を捨て去り、新しいものを取り入れているので、彼らがより良い習慣を選択できるよう、希望し、祈り、手を貸そうではないか。日本人は絵のような美しい物や習慣の多くをすでに打ち捨てているが、それらのあるものは捨てる必要がなかったのかもしれない。もし日本人が邪悪で穢れた憎むべき心の罪や行いや物だけを捨て、美しい習慣を維持したならば、なんと喜ばしいことであろうか！」（1877 年 8 月号）といった記述は、その心情をよく表している。

またグリフィスは、しばしば記事の最後において、日本の伝道活動や宣教師の様子に触れている。1876 年 9 月号では「我々の宣教師は、東京と横浜に在住している。タムソン牧師夫妻（Rev. and Mrs. David Thompson）、インブリー牧師夫妻（Rev. and Mrs. W.M.K. Imbrie）、グリーン牧師（Rev. Mr. Green）、ミス・ヤングマン（Miss Youngman）が東京の品川近郊のかなり湾に近い地域に居住し、ヘボン博士夫妻（Dr. J.C. and Mrs. Hepburn）とバラ牧師夫妻（Rev. and Mrs. J.C. Ballagh）が横浜に居住している。我々は日本に女学校を設立したので、読者の皆さんの援助を必要としている。少女たちに教育を授けるためにお金が必要であると同時に、そのための建物も必要である。」と宣教師名とその活動地を紹介している。東京と横浜は、グリフィスの記事に頻繁に登場

するので、読者にも既になじみのある地名であっただろう。グリフィスによってもたらされる興味深い日本の情報は、そこで活動する宣教師たちの姿に思いを馳せるのを容易にしたことは想像に難くない。

※訳者は下記の論文において、この事実に言及した。

齋藤元子「*Children's Work for Children* －米国長老教会女性海外伝道協会発行子ども向け機関誌－」明治学院大学キリスト教研究所紀要 41, pp. 53-82, 2008.

Children's Work for Children
Vol.1-8, August 1876
pp.120-121

Japanese Father at Home.
By W.E.G.（William Elliot Griffis）

家庭における日本の父親

一日の労働が終わると、父親（子どもたちは「おとっつあん（*O Totsu San*）」と呼ぶ）は、鍬（くわ）や鉋（かんな）、鋸（のこぎり）を仕舞い、自宅の畳の上に腰を下ろす。掲載の挿絵の背景には、格子窓、折りたたみ式腰掛、壁に掛けられた絵の端、植物が見える。日本人は花、そして花にまつわるすべてのものをとても好んでいる。挿絵に描かれている小さなテーブルは、４インチの高さである。わずか１フィート四方のそのような小さい家具を用いて、日本人は彼らの夕飯である米、魚、卵あるいは粟、豆類、大根を食する。父親と子どもたちは、楽しいひとときを過ごすが、残念ながら、小さな少年にとって何らよいことを学べる時間ではない。少年は父親に酒を注ぐ。この飲み物は、日本では人気があり、人を怒りっぽく、喧嘩好きにさせる愚かしい飲み物である。酒浸りの人は、アメリカと同じように、日本にも存在するが、日本のほうがはるかに哀れである。なぜならば、日本人の多くは偶像を崇拝しており、寺院の縁日などでは、偶像崇拝と酩酊状態のむかつくような光景を同時に目撃することができる。

父親の右側にいる子どもは、この絵を描いている画家を見つめているようであるが、左手は酒の椀を握っている。この子どもは、良いことであろうが、悪いことであろうが、父親が教えることをそのまま実行しようとしている。この子が何かもっと良いことを学ぼうとしていないのが哀れである。

二人の少年の名前は何というのであろうか？ たぶん、「太郎」、「三郎」といったような名前であろう。私が知っている日本の子どもの名前（かなりの数を知っている）をみると、「最愛の」、「愛」、「可愛い」といった意味を持つ名前が多く、それらは両親の愛情がいかに深いかを示すものである。

W.E.G.

JAPANESE FATHER AT HOME.

THE day's work is done, and father (the children call him O Totsu San) has laid aside his rice-hoe, or plane and saw, and is on his matting at home. In the background you see the latticed window, and camp-stool, and the edge of a hanging picture, and a plant. The Japanese are very fond of flowers, and everything in the flower world. See that little table, four inches high. On such a bit of furniture, only a foot square, the Japanese eat their dinner of rice and fish and eggs, or millet, beans and radishes. The father and children are having fine fun, but I am sorry to say that the little boy is not

learning anything good. He is pouring out some *saké*, or rice-beer. This drink is common in Japan, and makes the people who drink it stupid, cross and quarrelsome. Drunkenness is almost as common there as in our country. This is the greater pity, since many of the Japanese people worship idols, and around their temples, on festival days, disgusting scenes of idolatry and intoxication may often be witnessed together.

The little fellow on the father's right seems to be looking cross at the artist who is taking the picture, but he holds on to the saké-bowl with his left hand. He will do just what his father teaches him, whether good or evil. It is a pity that he is not learning something better.

What are the boys' names? I suppose Taro, Saburo, or something like that, for all the Japanese children I know—and they are many—have a name which means "darling," or "love," or "sweet," or something which shows how deep is their parents' affection for them. W. E. G.

Children's Work for Children
Vol.1-9, September 1876
pp.132-135

The Empire of Japan.
By W.E.G.（William Elliot Griffis）

日本帝国

日本は中国と同じであると多くの人が思っているであろう。人々は日本があたかも中国の一部であるかのように話す。これは誤りである。日本と中国は二つの異なる国であり、数百マイルも離れている。中国は日本の 10 倍の国土を持ち、二つの国の特徴はかなり異なっている。日本はアメリカのニューイングランドと中部諸州を合わせた位の広さである。本土（日本）[1]・四国・九州・蝦夷と呼ばれる 4 つの大きな島と琉球・千島列島、さらには、四千近い小さな島々から成る。小さな島々の大きさは、アメリカの一つの郡程度から寝室ほどのものまである。日本の人口は、約 3300 万人である。琉球に住む人々は真の日本人とは異なり、蝦夷に住む人々はアイヌと呼ばれている。アイヌの目は、私たちアメリカ人と同じように、直線であり、恐らく、日本において最古の人種である。日本は帝国と呼ばれている。なぜならば、ミカドまたは天皇と呼ばれる人物が、自らの家臣のほかに、他の人々も統治しているからである。

日本は山脈と渓谷によって形作られ、周りを荘厳な青い海に囲まれた非常に美しい国である。海岸線には無数の港が存在し、そこに住む人々は、冒険好きの船乗りや漁師である。数千の人々が毎朝船出し、海から自分たちの朝食を引き上げる。陸地においては、主要な作物は米で、日本人はパンを食べない。「米は生命の糧」であり、一日三回食されている。日本人は、米にレーズン・砂糖・ナッツメッグ・糖蜜などを混ぜたりせず、箸を使って、パンあるいは野菜のようなものとして食べる。お茶はだれもが好む飲み物である。6 セントでも、6 ドルでも、1 パウンドでも、

欲しいだけの値段や量を買うことができる。

大日本は「偉大なる太陽の源」あるいは「日出づる国」という意味である。本土は「最も大きな島」という意味であり、東京という国の首都があり、帝(ミカド)もここに居住している。1868年以前は、江戸と呼ばれていたが、現在ではその時代について話が及ばない限り、「江戸」と呼ぶ日本人はいない。東京はニューヨークよりも広く、92万5000人が居住している（東京およびその近郊の地図参照。この地図は並べて掲載した日本地図よりもかなり縮尺を大きくしてある）。隅田川は美しい川で、東京を貫いて流れている。しかし、利根川の水が全長9マイルの水路を通って井戸に水を供給している。東京から約18マイルのところに横浜がある。横浜とは、「横の岸（cross-shore）」という意味である。ここ横浜の港にカリフォルニアからの大型蒸気船が到着する。というのは、東京湾は蒸気船が停泊できるほど深くないからである。地図を見ると、横浜の反対側には神奈川という大きな町がある。さらには、船の修理場や操船所が密集する横須賀がある。続く鎌倉は、かつては大きな都市であったが、今はただの小さな村である。鎌倉近郊には、大きな銅製の偶像、すなわち仏像がある。その高さは44フィート、親指の長さは3フィート、膝は日曜学校の小グループが全員座ることができるほど広く、仏像の内部は大量の乾草を貯蔵することができる。この仏像は六百年以上前に建立された。

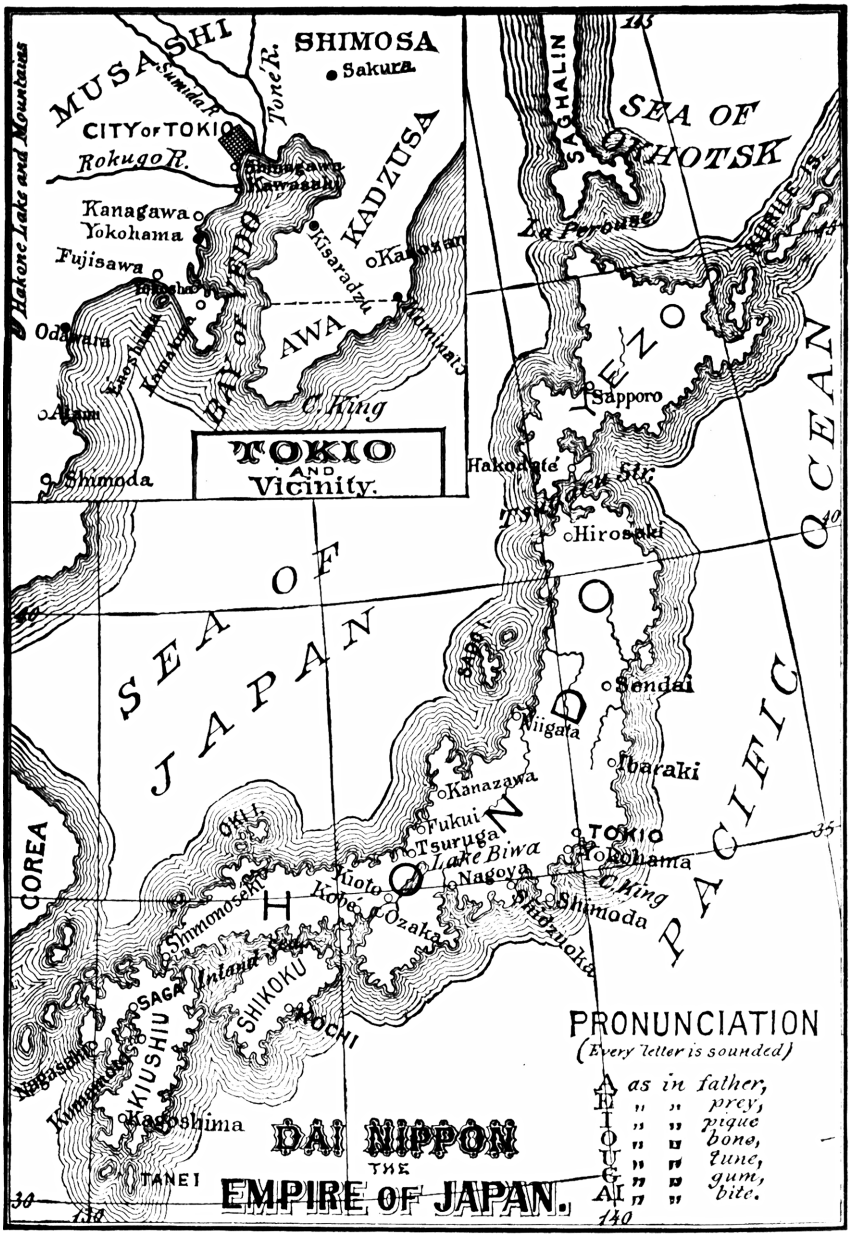
江の島は、湾に浮かぶ愛らしい島で、ピクニックの場所として好まれている。宣教師たちも、暑い日や疲れて気晴らしが必要な時に訪れる。涼やかな海風に加えて、見事なガラス海綿や多様な珍しい魚やサンゴを海岸で見つけることができる。藤沢には、日本の偉大な人物が多数埋葬されている古い寺院がある。小田原には、荒廃した古い城があり、その周辺で昔多くの戦があった。熱海には温泉がある。下田は、我が国最初の日本領事であるハリスが居住していたところである。箱根の湖は非常に美しく、海抜約5000フィートの山間部に数マイルの長さにわたって横たわっている。湖から数マイルのところに、富士あるいは富士山(フジヤマ)（ヤマはマウンテンの意味である）と呼ばれている崇高な山がある。高さ1万2000フィートで10月から6月までは雪で白く覆われている。夏でも、

噴火口（というのは、古い火山だからである）は、氷水や雪で満たされている。たぶん、読者の皆さんは扇・お盆・家具などの繊細な日本の工芸品に描かれた富士山や彫られた富士山を見たことがあるであろう。箱根は、彫刻や象眼模様を施した木工品の産地としても有名である。静岡は、漆細工の家具の産地で、最後の将軍（タイクン）（もはや将軍は存在しない）の居住地であった。名古屋は我々がアメリカで使用しているような扇を毎年何千も製造している。琵琶湖は全長60マイルの美しい湖である。京都はかつての首都である。大阪は大都市で、熊本と鹿児島も大きな都市である。

北の蝦夷は非常に寒く、南の九州はかなり暖かい。日本の中央部は涼しい。我々の宣教師は、東京と横浜に在住している。タムソン牧師夫妻（Rev. and Mrs. David Thompson）、インブリー牧師夫妻（Rev. and Mrs. W.M.K. Imbrie）、グリーン牧師（Rev. Mr. Green）、ミス・ヤングマン（Miss Youngman）が東京の品川近郊のかなり湾に近い地域に居住し、ヘボン博士夫妻（Dr. J.C. and Mrs. Hepburn）とバラ牧師夫妻（Rev. and Mrs. J.C. Ballagh）が横浜に居住している。我々は日本に女学校を設立したので、読者の皆さんの援助を必要としている。少女たちに教育を授けるためにお金が必要であると同時に、そのための建物も必要である。

東京・横浜の他に宣教師が活動している場所は、函館、新潟、神戸、大阪、静岡、長崎、熊本である。

W.E.G.


TOKIO
AND
Vicinity.
MUSASHI
SHIMOSA
Sakura
CITY OF TOKIO
Rokugo R.
Tone R.
Sumida R.
Kanagawa
Yokohama
Fujisawa
Odawara
Atami
Shimoda
Hakone Lake and Mountains
KADZUSA
Kisaradzu
Kamakura
Kimitsu
BAY OF YEDO
AWA
C. King
SAGHALIN
SEA OF OKHOTSK
La Perouse
YEZO
Sapporo
Hakodate
Tsugaru Str.
Hirosaki
SEA OF JAPAN
NIPPON
Sendai
Niigata
Ibaraki
Kanazawa
Fukui
Tsuruga
Lake Biwa
Kioto
Kobe
Ozaka
Nagoya
TOKIO
Yokohama
C. King
Shimoda
Hiogo
Shimonoseki
Inland Sea
SHIKOKU
KOCHI
KIUSHIU
SAGA
Nagasaki
Kumamoto
Kagoshima
TANEI
OKI I.
COREA
PACIFIC OCEAN
PRONUNCIATION
(Every letter is sounded)
A as in father,
E " " prey,
I " " pique
O " " bone,
U " " tune,
G " " gum,
AI " " bite.
DAI NIPPON
THE
EMPIRE OF JAPAN.

THE EMPIRE OF JAPAN.

MANY people think that the Japanese are the same as the Chinese. People talk of Japan as if it were a part of China. This is a mistake; Japan and China are two different countries, many hundred miles apart. China is ten times larger than Japan; the two nations are quite different in character. Japan is about as large as our New England and the Middle States. It consists of four large islands, Hondo (Niphon), Shikoku, Kiushiu, Yezo, and the Liu Kiu and Kurile groups, besides nearly four thousand little islands. These latter range from the size of one of our counties to that of a bed-room. The Japanese people number about 33,000,000 souls. The people in Liu Kiu are a little different from the Japanese proper, and in Yezo the people are called Aino. They have eyes set straight like ours, and are probably the most ancient race in Japan. Japan is called an empire because the *mikado*, or emperor, rules over other people besides his own subjects proper.

The country is very beautiful, made up of mountains and valleys, while all around is the glorious blue sea. The coast is full of harbors, and the natives are daring sailors and fishermen. Thousands go out every morning in their boats to draw up their breakfast out of the sea. On land the chief crop is rice: the people eat no bread. "Rice is the staff of life," and is eaten three times a day. They do not put raisins, sugar, nutmeg or molasses in it, but eat it with chop-sticks, as bread or vegetable. Tea is everybody's drink. You can buy it for six cents, or six dollars, a pound, as you wish.

Dai Nippon means "Great Sun-root," or, "The Land of

the Rising Sun." Hondo means "main island." The capital is Tokio. The mikado lives here. It was formerly, until 1868, called Yedo; but no Japanese now says "Yedo," unless he supposes you are not up to the times. Tokio is larger in size than New York, and contains 925,000 people. (See the map of Tokio and vicinity, which is on a much larger scale than the other.) The Sumida is a beautiful river flowing through it; but the Toné river supplies the water to wells through an aqueduct nine miles long. About eighteen miles from Tokio is Yokohama, which means "cross-shore." At this port the great steamships arrive from California. The water at Tokio is not deep enough to allow them to anchor off that city. On the map you will also see Kanagawa, a large town opposite Yokohama. Further on is Yokoska, full of dock-yards and ship-building houses. Next is Kamakura, once a famous large city, but now only a village. Near it is the great copper idol or image of Buddha. It is forty-four feet high. Its thumbs are three feet long; a small Sunday-school might sit on its lap and several loads of hay be packed inside of it. It was placed there over six hundred years ago.

Enoshima is a lovely island in the bay, where the people and travellers make picnics. In hot weather, or when wearied and needing a change, the missionaries visit it. Besides its cool sea-breezes, one finds the wonderful "glass-sponges" and all sorts of curious fish and corals along the shore. At Fujisawa is an ancient temple, in the grave-yard of which many of Japan's great men are buried. At Odawara are the ruins of an old castle, round which many battles were fought long ago. At Atami are

hot springs. At Shimoda lived Mr. Harris, our first consul to Japan. Hakone Lake is very pretty. It is several miles long, and lies in the mountains about five thousand feet above the sea level. A few miles from it rises the glorious mountain called Fuji or Fusiyama (*yama* means mountain). It is over 12,000 feet high, and is whitened with snow from October to June. Even in summer, its crater (for it is an old volcano) is full of ice, snow and ice-water. Thousands of people climb it every summer. You have perhaps seen it painted or carved on fans, trays, cabinets and other dainty things made in Japan. Hakone is also famous for pretty carved and inlaid wood-work. In Shidzuoka, many pretty cabinets of lacquer-work are made. The last *tycoon* (there are no *tycoons* any more) lived here. Nagoya makes thousands of fans, such as we use in America, every year. Lake Biwa is sixty miles long and very pretty. Kioto is the old capital. Ozaka is a very large city, and so are Kumamoto and Kagoshima.

Up in Yezo it is very cold; down in Kiushiu it is quite warm; in the central part of Japan it is cool. Our missionaries live in Tokio and Yokohama. Rev. and Mrs. David Thompson, Rev. and Mrs. W. M. K. Imbrie, Rev. Mr. Green and Miss Youngman live in Tokio, in the corner near Shinagawa, quite on the shore of the bay. In Yokohama, Dr. J. C. and Mrs. Hepburn, and Rev. and Mrs. J. C. Ballagh live. We have a girls' school there, for which we shall need your help. We want a nice new house for it, as well as money to pay for teaching the girls.

There are also missionaries laboring at Hakodaté, Niigata, Kobé, Ozaka, Shidzuoka, Nagasaki and Kumamoto.

W. E. G.

Children's Work For Children
Vol.1-9, September 1876
pp.136-139

The Religion of the Japanese.
By W.E.G.（William Elliot Griffis）

日本の宗教

日本には二種類の宗教が存在する。一つは偶像を崇拝し、もう一つは偶像の崇拝はない。前者は仏教であり、中国やシャムでも見られるものである。後者は神道と呼ばれ、日本固有のものである。

神道を信仰する人々は、自分の先祖の魂と神（*kami*）を崇拝している。神は無数に存在する。善良な神もいれば、邪悪な神もいる。ある神は太陽に宿る神で、人々が太陽に礼拝して祈る姿を私はよく目撃した。掲載の絵は、太陽の神を拝むために、多くの人々が海岸で日の出を待ちわびている様子を描いたものである。絵の左側には、鳥居（*tori-i*）と呼ばれる石の門の上部が見える。鳥居の下には神殿に至る道があるが、この神殿には偶像は置かれていない。紙製の風変りな帽子をかぶり、白のゆったりとした式服を身に付けた三人の神官が、上質の木材でできた小さなテーブルに立てかけてある細長い白の帯に面して座っている。二本の竹の棒が地面に突き刺され、紙の小片を吊り下げた稲の藁の紐が張り渡されている。これらすべてが日本の古い書物に記された話に関係するものである。紙の提灯は、火が燈されていようがいまいが、常に多数設置されている。右側には、高い石の彫刻が見えるが、中に芯のある油皿が置かれ、ここでも燈火が保たれている。左右両側には、小さな台が置かれ、そこに男女が座っている。彼らはまるでピクニックをしているようである。なぜならば、彼らは食べたり飲んだりしているからである。米･魚･菓子・砂糖水・米製のビールなどが盆に盛られている。彼らと神官の間には、白い紙を突き刺した棒が地面に立てられ、神官はピクニックから

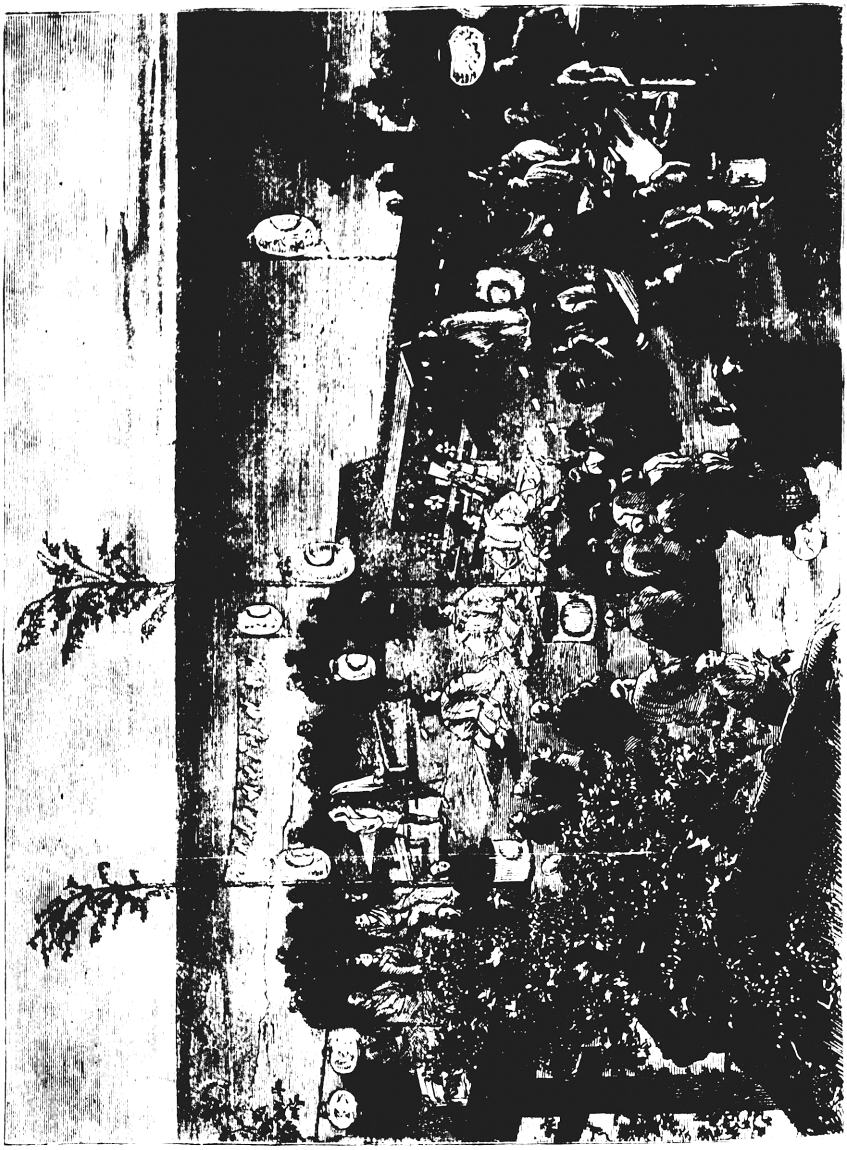
隔てられている。絵には、髪が薄くなり髷が貧相な老人や頭をそった少年、豊かに髪を結いあげ重ね着をした女性の姿も見られる。

神官が白い式服をまとい、魚・米・豆類・果実・水などあらゆる種類の食べ物を神殿に供える。人々はその神殿に参拝する際、神に感謝し、自分自身のみならず、家族や友達も災いから守られ、恵みが与えられるように祈る。祈る前に、人々は祭壇の前の扉に吊り下げられている鈴を鳴らして神の注意を引き、彼らの感謝や嘆願の言葉に耳を傾けてもらえるようにする。家庭においては、人々は扉の上に「神棚」を設けている。祭壇の正面には火が燈され、食事の前には、「感謝の祈り」の印として食べ物を盛った小皿を供える。

神道の崇拝には多くの真実や良いことがあるので、もし、すべての神が本物であり、善良かつ潔白なものであるならば、なぜ私たちは日本に宣教師を送る必要があるのかと読者の皆さんはいぶかしく思うであろう。しかし、悲しいかな、神の多くは、邪悪で堕落した悪魔のような性格の持ち主である。たとえ良い神であっても、日本の古い書物によれば、それらは純粋な性格を持ち合わせていない人間の男女に過ぎないという話である。

神道には800万以上の神が存在すると聞くと、皆さんはそれほど多くの神を異教徒がいったいどこから見つけてきたのかと不思議に思うだろう。それは、唯一の真の神を知らない人間の思考から簡単に作りだされる。川・山・洞窟、あるいは、風・雨・雷・地震、あるいは、台所・井戸・野原・屋根といったありとあらゆるものの中に神や精神をイメージする。それは、あたかも、ワシントン、パットナム[2]、コロンブス、ピーター・パーレー[3]、ユダ、サンタクロース、マザーグースに登場する靴の家に住んでいたおばあさんや年老いたコール王などなど、良い人も悪い人も、実在する人も想像上の人物も、あらゆるものを私たちが神とみなして崇拝するようなものである。キリストが地上に降り立った時、我々の祖先は醜悪な偶像を崇拝し、生きている人間を大きなバスケットに詰め、それら偶像の前で焼いた。神の恵みにより、我々は今ある我々のようになった。それゆえに、日本人が真の神ではない無数の神を忘れ、唯一の生ける神と彼が遣わしたイエス・キリストに仕えることを願う。

W.E.G.



THE RELIGION OF THE JAPANESE.

THERE are two religions in Japan. In one they worship idols, in the other they do not. One is Buddhism, which is found also in China and Siam. The other is Shinto, which is practised only in Japan.

Shinto people worship the souls of their ancestors, and the *kami* or gods. There are many millions of *kami.* Some are believed to be good and kind. Some are bad and spiteful. Some are very wicked. One of the *kami* is the goddess of the sun, and I have often seen people bowing down to the sun and praying to it. In the picture we see many people by the seashore waiting to see the sun rise, that they may worship the sun goddess. On the left you can just see the top corner of a stone gateway, called a *tori-i,* under which a path leads to a temple, in which, however, are no idols. The three priests, with paper caps of curious shape on their heads, and dressed in loose robes of white, sit down before strips of white paper resting against a little table of fine wood. Two poles of bamboo are stuck in the ground, and a strip of rice rope with bits of paper hanging from it is stretched across. These all refer to stories in their ancient books. Lanterns of paper are always plentiful, whether lighted or not. On the right is a tall stone structure, also holding a lamp—a dish of oil with a wick of pith. On the right and left are small platforms, on which sit men and women. They are making a picnic of it, for they are eating and drinking. Rice, fish, candies, cakes, sugar-water, rice-beer, and other eatables are on their trays. The priests also are hedged off by a square of white paper stuck

on sticks in the ground. You can tell the old men by their thin hair and scanty top-knots, the little boys by their shaven heads, and the women by their full hair and clothing.

In their worship in the temple the priests dress in white robes, and make offerings of fish, rice, beans, fruits, water, and various articles of food. Then they give thanks, and pray to the *kami* to keep them from danger, and to bless them and their children and friends. Before praying, the people pull a bell hung on the door before the shrine, to call the attention of the *kami* to their words of thanks, or petition. Inside their houses the people have a little "god-shelf" over the doors. In front of this altar lights burn, and before eating a meal they offer a little dish of food as a sort of "grace."

There are many true and good things in Shinto worship, and if the *kami* were real and were all good and pure, one might wonder why we send missionaries to Japan. But, alas! many of the *kami* are wicked and vile and of devilish character. Even of the good *kami* the ancient Japanese books tell stories that show them to be only men and women of not very pure character.

When you are told that there are over eight million gods in Shinto, you may wonder where the heathen get so many. They are easily made out of the thoughts of men, who, knowing not the one true God, imagine a god or spirit in every river, mountain, and cave, or in the wind, rain, lightning, and earthquake, or in the kitchen, the well, the field, and the housetop. It is as though our people were to worship Washington, Putnam, Columbus, Peter Parley, Judas, Santa Claus, the Old Woman that Lived in a Shoe, Old

King Cole, Mother Goose, and other people good and bad, real or imaginary, and call them *kami* or gods. When Christ came on the earth, our ancestors were worshipping hideous idols, and burning men alive in big baskets before them. By the grace of God we are what we are now. So may the Japanese learn to forget their crowds of gods, that are no gods, and serve only the one living God, and Jesus Christ whom He has sent. W. E. G.

Children's Work for Children
Vol.1-9, September 1876
pp.139-140

A Japanese Piano.
By W.E.G.（William Elliot Griffis）

日本のピアノ

合衆国独立百周年記念万国博覧会[4]のメイン会場の展示の一つに、日本の楽器のコレクションがある。そこでは、ドラム、フルート、ギター、バンジョー、そして、琴を見ることができる。掲載の絵は若い女性が琴（*koto*）を演奏している姿である。琴は日本のピアノと呼ぶことができる。なぜならば、私たちのピアノと同じように、一組の弦が共鳴板の上に張られているからである。

挿絵の女性は、ピアノを前にして、床のマットの上に膝を曲げて座っている。彼女の脇には、本棚あるいは彼女の様々な装飾品を収めた箪笥が置かれている。彼女は裁縫用の指抜きのような形をした革製の輪を指にはめている。この輪は象牙でできた尖った先を支えるもので、まるで指の誤った側から爪が長く延びてしまったようである。左右にスライドさせることができる橋型の柱の後方にある弦を左手で押しながら、右手の指で演奏する。弦の数はまちまちで、9本であったり、11本であったり、13本の場合もある。また、琴を支える脚は2本のものもあれば、4本のものもある。多くの琴は美しく、高価な木材で作られており、象牙や金、淡水産の貝がはめ込まれている。

上流階級の若い女性のみが琴を習っている。日本の少女の多くは、三本弦のバンジョーのような楽器を弾く。アメリカでは手回しオルガン弾きが街頭で演奏しているが、日本ではこのバンジョーのような楽器を弾きながら町中を歩きまわる者を見かける。

日本の音楽は、私たちの耳には、心地よく聞こえない。音階が我々の

とは異なっているからである。最初その音は、糸をこすり合わせるような耳を覆いたくなる音、あるいは、潤滑油が必要な納屋の大扉、さらに悪く言うと、病気の子猫の一群が泣き叫んでいるような騒音を思い起こさせる。しかし、その音にもし慣れてきたならば、音の中にある種の音楽が存在していると思うようになるであろう。

しかし、今や日本人は、自らの古来の音楽をしまい込み、私たちの音色を学ぼうとさえしている。陸軍や海軍の軍楽隊は、アメリカの“Hail Columbia”やイギリスの“God Save the Queen”、ロシアの美しい“Russian Hymn”を演奏する。とりわけキリスト教会や日曜学校では、我々がよく知っている心地よい讃美歌を耳にすることができる。私は横浜と東京の小さな子どもたちが「主われを愛す」や「千歳の岩よ」を日本語で歌っているのをよく聞く。神のご加護のもと、音楽や歌の中の真理が力強い働きとなって、人々が罪や偶像から真の神への信仰へと導かれることを私は信じている。その実現を望み、一緒に祈ろうではないか。

W.E.G.

A JAPANESE PIANO.

IN one of the cases in the Main Hall of the Centennial Exhibition is a collection of Japanese musical instruments. Drums, flutes, guitars, banjoes, and the *koto* may be seen there. The young lady in the picture is playing on a *koto*. We may call it a Japanese piano, because, like ours, it has a set of strings stretched above a sounding-board.

The lady kneels on the matting of the floor before her piano. Beside her is her book-case or cabinet, in which she keeps little articles of dress, use or ornament. She usually tips her fingers with loops of kid, like thimble-rings, holding ivory points, like a long finger nail growing on the wrong side of the finger. With her left hand she

presses on the cords behind the bridges, or sliding supports, on the board. She plays with her right-hand fingers. Some *kotos* have nine, some eleven, some thirteen strings. Some rest on two, some on four feet. Many are handsome and made of costly wood, inlaid with ivory, gold, and tortoise-shell.

Only young ladies of the higher classes learn to play the *koto*. Many girls play the three-stringed banjo. Instead of organ-grinders in our country, strolling players go round the streets in Japan playing the banjo.

Japanese music is not sweet to our ears. The scale of music is different from ours. It sounds at first like the noise made when you tie your ears shut with strings, and then draw one string across the other. Or it reminds one of an old barn-door that needs greasing, or worse than all, like the noise made by a company of sick kittens. Still when you become used to it, if you ever do, it has some real music in it.

But even the Japanese themselves are putting away their own old music and learning our tunes. The bands of the army and navy play "Hail Columbia," and "God Save the Queen," and the beautiful "Russian Hymn." Especially in the Christian churches and Sunday-schools may be heard the sweet hymns so familiar to us. I have often heard little "Plum-blossom," and "Purple," and "Cherry," and the other Japanese boys and girls in Yokohama and Tokio sing "Jesus Loves Me" and "Rock of Ages," in their own language. I believe that, under God's blessing, music and the truth in song are to do a mighty work in leading the people from sin and idols to God and holiness. Let us hope and pray that it may be so! W. E. G.

Children's Work for Children
Vol.1-11, November 1876
pp.168-170

Travelling in Japan.
By W.E.G.（William Elliot Griffis）

日本の旅

カリフォルニアから4000マイル離れた太平洋の反対側に位置する国、日本では、人々はカゴ（*kago* のaの発音はarmのaと同じである）に乗って旅をする。旅の仕方としては、その他にも多くの方法がある。たとえば、馬の背に乗せた高い荷鞍または低い荷鞍に跨って行く。あるいは、男たちが引く小さな車に乗る。あるいは、男たちに背負われるという方法すらある。しかし、田舎ではカゴが最も便利である。

カゴは下の部分を丸く曲げた二本の竹の棒でできており、別の一本の棒に吊り下げられている。インドでは、一人乗り用担ぎカゴの天秤竿はカゴの中央部に取り付けられているが、日本では、天井部にわたされている。竹は、アメリカでは釣り竿に使用されるものであるが、日本では竹の小さな森があり、子どもたちはその藪の中で遊ぶことが好きである。

カゴの底部は木材でできており、籐の椅子のように、裂いた竹材が敷き詰められている。この上に、クッションが置かれている。乗り方は、両足を折り曲げて体の下に入れて座る。この姿勢は、アメリカ人にとっては、窮屈でうんざりさせられるものである。すぐに足がしびれてきて、感覚が戻らなくなってしまう。しかし、日本人は子どもの頃からそれに慣れており、膝や踵の上に座ることが苦ではない。読者の皆さんも、私のように、カゴに乗ることに慣れたならば、読書をしたり、昼寝をしたり、通過する山々や谷間の美しい日本の景色を楽しめるようになる。

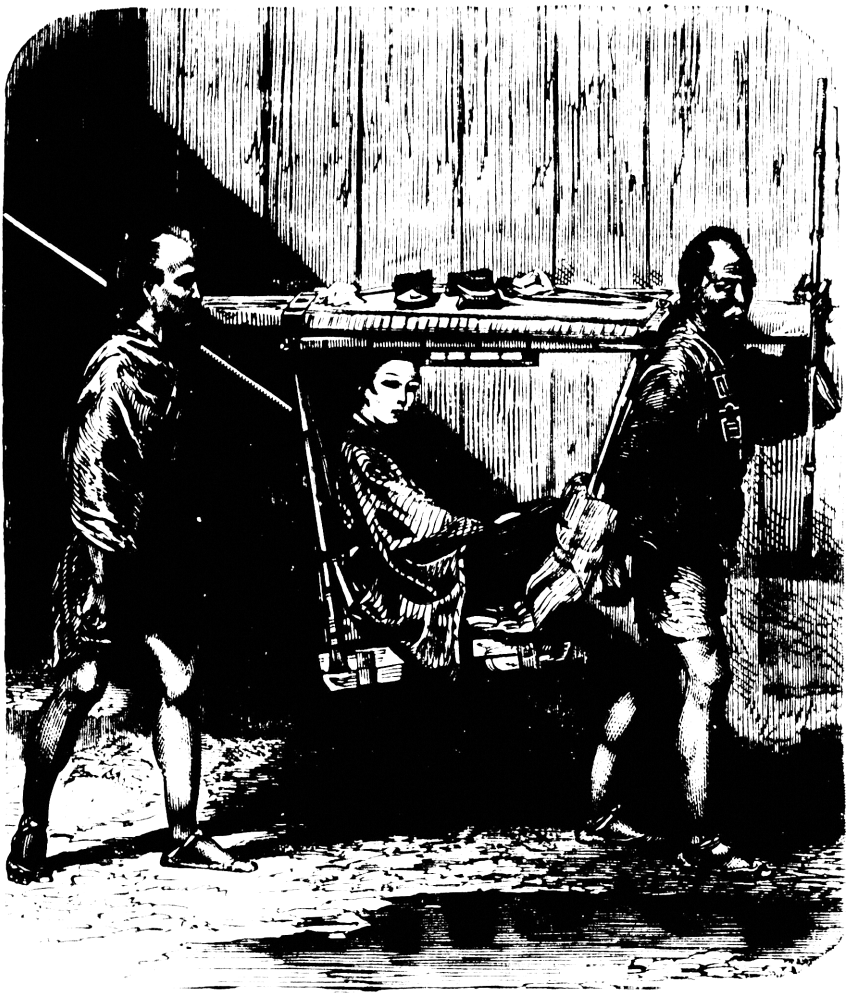
掲載の挿絵は、若い女性が下駄、つまり、木製の靴を脱ぎ、膝を折り曲げて乗っている様子である。絹あるいは木綿でできた着物の長い筒状

の袖が目を引くはずである。

カゴの天井部は、干し草を編んだ一枚の板で覆われ、直射日光や雨を遮る役目をはたしている。この上に、荷物や履物なども積むことができる。横には裂いた竹の糸でできたカーテンが巻き上げられている。男たちは、軽い積荷とともに、楽しそうに歩んでいる。なぜなら、軽量の若い女性は、200ポンドも体重があるような肥満の男性とは大きな違いがあるからである。重い人を運搬する時、運び手は息を切らし、汗をかき、不平を言いがちであるが、私もしばしばそれを耳にしている。男たちの左手に短い竹の棒が握られているのが見えるであろう。担ぐ肩を換える際、これに重心を預けるのである。彼らの衣服は、安価な木綿でできており、同じように安っぽい藁のサンダルをはいている。二人のうち一人の男の衣服の襟元に、茶箱に書かれているような奇妙な文字で、その男の名前が描かれているのが見えるだろう。彼らの背中には、彼らが所属する同業者組合あるいは会社の印かイニシャルを示す文字が描かれている。前側の男は、道を跨いでいる小さな水の流れの中に、今まさに踏み込もうとしているところである。

カゴに乗って日曜学校に行くのはどうだろうか？ 頭をぶつけずに乗れるだろうか？ 転倒せずにひざを折り曲げることができるか？ いずれにしても、もしあなた方が日本人、または日本にいる宣教師だったならば、この乗り物をしばしば利用するに違いない。

W.E.G.



THE KAGO.

TRAVELLING IN JAPAN.

PEOPLE travel in the *kago* (*a* pronounced as in *arm*) in Japan, that country which lies across the Pacific Ocean, four thousand miles from California. There are many other ways of travelling, such as sitting on a high pack-saddle (or a low one) on horseback, or

riding in the little carriages drawn by men, or even pick-a-back on men's shoulders. But in country places the *kago* is most convenient.

It is made of two bamboo poles bent round at the bottom and slung on a pole. In India the beam of the palanquin is at the centre. In Japan it is at the top. Bamboo is what our fishing-poles are made of, and there are groves of it in Japan, under which children love to play.

The bottom of the *kago* is of wood, filled in with cane, like a cane-seat chair. On this a cushion is laid. You get in and double up your legs, putting your feet under you. It is cramping and tiresome to an American, and his feet soon get asleep and won't wake up. But the Japanese are used to it from childhood, and as they sit on their knees and heels, they do not mind it. When you become accustomed to it, as I have done, you can read a book, take a nap or look at the beautiful scenery of Japan, as you pass along over mountains and through valleys.

In the picture the young lady has taken off her clogs or wooden shoes, and rides with knees doubled up. Note her long loose sleeves of striped silk or cotton stuff.

The top of the *kago* is a flat piece of plaited rushes, to keep off sun and rain. On this you can stow baggage, shoes, &c. At the side, rolled up, are the curtains of split bamboo thread. The men plod merrily along with their light load, for a slight young girl is a very different affair from a great fat fellow of two hundred pounds or so. Such a burden makes the coolies or bearers puff and perspire and blow and grunt, as I have often heard them do. You see in their left hand a short bamboo pole. On this they rest their bur-

den when they "change shoulders." Their dress is cheap cotton stuff, not too much of it either, with straw sandals on their feet. On the lappel of the dress of one of them you see the man's name in curious tea-box characters. On their back they have a letter which is the sign or initial of the guild or company to which they belong. The front man is about to step into a little rivulet of water which flows across the road.

How would you like to ride in a *kago* to Sunday-school? Do you think you could get in without bumping your head? or fold your knees without upsetting? Yet if you were a Japanese or a missionary in Japan, you would make use of this vehicle often. W. E. G.

Children's Work for Children
Vol.2-8, August 1877
pp.116-119

The Mikado's Palace Band.
By William E. Griffis.

ミカドの宮廷音楽隊

今回は、ミカドすなわち日本の天皇の住まいである皇居を少し紹介しよう。皇居はかつて京都という都市にあった。京都は 794 年から 1868 年まで日本の首都であったが、東京に遷都された。

挿絵に描かれている 5 名の男性は、宮廷音楽隊に属する音楽家である。音楽隊は総勢約 20 名で、以前は緋色のサテンに金襴の刺繍を施した丈長のゆったりとした礼服を着ていた。また、彼らは頭に漆塗りの曲線的なヘルメットを被っていた。この種の頭飾りは彼ら音楽家のみが身につけるものであった。さらに、彼らの服装には数ヤードの長さがある平たい尻尾のような長い絹の裾があった。ドラムを演奏している男性の背中のベルトの上部に、一種のカーブしたフレーム、つまり、上に向かって突き出ている輪が見えるであろう。これが、固い「裾受け」あるいは「スカートサポーター」と呼べるものであり、裾を持ち上げるために使われた。歩くときには、長い襞（挿絵の床に見えるもの）は畳まれ、そのフレームの上に掛けられる。挿絵の中でたて笛を吹いている（というよりも、むしろ吸っている）男性のベルトからも同種のものが突き出ているのが見えるであろう。

彼らの上着はなんと豪華な刺繍が施されていることだろう！ 私は 1872 年に東京で音楽隊全員による演奏を実際に聴いたことがある。メンバーの何人かはまばゆく輝く金銀の衣装をまとっていた。それらの豪華な衣装は、金銀の刺繍で固められたものだった。日本の一般民衆が、この楽隊の演奏を聴く機会があったとしても、それは非常にまれなこと

である。なぜなら、この楽隊は天皇や高貴な人々を楽しませるためにのみ、皇居に存在しているからである。演奏される曲のいくつかは、千年以上前に作られたものである。

楽器に注目してみよう。まず、大きな縦型のドラムがある。そこには、ミカドの治世の悠久の歴史を意味するシンボルが描かれている。それはあたかも永遠に続く運動における3つのコンマのようにみえる。ドラムはカーテンの真横に設置され、2本の詰め物をしたようなスティックでたたく。その右側には、手で持ち運べる横置きのドラムを演奏する男性がいる。彼はまた大声で時を告げ、あるいは歌詞を叫ぶ。そのために、挿絵の彼の口は開いている。彼の後ろには、フルートとフラジョレットの奏者がいる。最も右側にいる男性は、珍しい日本の楽器をもっている。この楽器は数本のまっすぐな竹の筒を銀の輪で束ねたもので、銀製のマウスピースが付いている。不思議なことに、奏者は、息を吹き出す代わりに、空気を吸っている。

奏者の衣装の豊かに流れる袖やヒノキ（陽の木）と呼ばれる純白の木材に磨き上げられた鉄をかぶせた手すりが描かれているのに気付いたであろう。大きなドラムの周囲には、炎を意味する赤く塗られた舌、すなわち鉤状の突起物がある。淵の上には、一匹のドラゴンが縫いこまれている。これらのすべてが天皇の存在や権力を象徴するものである。金襴のたっぷりとしたカーテン、中央には繊細な竹の繊維でできた衝立が見えよう。たぶんミカドはその衝立の後ろにある玉座に隠れているのであろう。1870年まで、天皇は滅多に出歩くことはなく、位の高い貴族以外の目に触れないように、衝立の後ろに隠れて暮らしていた。日本人の中には、彼を神と崇め、愚かにも京都の方角に向って祈る人もいた。

しかし、日本は近年大きく変化した。1874年、ミカドが東京にある帝国大学を訪問した際、2頭のアメリカの馬が引く屋根なし馬車に乗ってやってきた。だれもがミカドを見ることができ、子どもたちはみな、ことわざにもあるが、猫のように「一人の王をみる」ことができた。天皇を乗せた馬車が大学の構内に到着すると、宮廷の音楽隊が歓迎を表す日本の曲を演奏した。音楽隊に目を向けると、彼らは直立しており、かつて彼らを大きく立派に見せていた赤いサテンや金銀のゆったりとした

上着は身に着けていなかった。なんということだろうか！ 彼らは細身のズボンと革のブーツをはき、山高帽をかぶり、黒のコートとベストをはおり、白のネクタイをしているではないか。彼らは小人のように小さく見え、事実彼らは小柄だった。私は彼らの姿から、2列に並んだ白首の黒いカラスが立ち上がって、横笛を吹き、ドラムを叩いて、甲高いしわがれた鳴き声を出しているところを連想してしまった。そして、今にも羽を広げて、カーカー鳴きながら飛び立っていくのを想像できるほどであった。

今ここで日本の音楽について詳しく話す余裕はないが、それらは我々の耳に決して心地よいものではない。現在、日本の陸軍と海軍の楽隊は西欧の楽隊と似ているが、彼らは、音楽というよりも、騒音を奏でているといった感じである。いくつかの公立学校でも、少年少女が西欧式の音階と音色で歌うことを学び、西欧の歌を習得している。しかしながら、一般的な日本人の耳には、西欧の音楽は恐ろしく無意味なものに聞こえている。これは、日本の音楽が我々の耳に無意味に聞こえるのと同じことである。音楽を理解することは、ほぼ完全に教育の問題である。

日本人は年々古い習慣を捨て去り、新しいものを取り入れているので、彼らがより良い習慣を選択できるよう、希望し、祈り、手を貸そうではないか。日本人は絵のような美しい物や習慣の多くをすでに打ち捨てているが、それらのあるものは捨てる必要がなかったのかもしれない。もし日本人が邪悪で穢れた憎むべき心の罪や行いや物だけを捨て、美しい習慣を維持したならば、なんと喜ばしいことであろうか！ 偶像崇拝・うそをつくこと・卑猥・一夫多妻、その他様々な名称の数え切れないほど多くの罪といった邪悪な事柄は破棄するあるいは忘れ去ってほしいものである。神に感謝！ 多くの日本人はそれを実践している。我々の宣教師が最初に日本に渡って以来、何百という家が偶像を処分し、多くの家庭が浄化されている。日本の多くの場所で、日本人クリスチャンが今や毎安息日に神を賛美する讃美歌を歌うために集まっている。彼らは挿絵にあるような豪華な衣装や楽器は身につけていない。しかし、もっと素晴らしいことに、彼らは正直な心と敬虔な歌声を携えている。その歌声が広がりますように！

Schenectady,N.Y.

THE MIKADO'S PALACE BAND.

By William E. Griffis.

HERE we have a glimpse into the imperial palace of the mikado or emperor of Japan. It used to be in the city of Kioto, which was the capital of the empire from the year 794 until 1868. Then it was removed to Tokio.

The five men in the cut belong to the palace band of musicians. They number about twenty in all, and formerly dressed in long loose robes of scarlet satin and gold embroidered brocade. They wore on their heads curved helmets of lacquer ware. This kind of head gear was worn only by these musicians. They also had long trains of silk, like a flat tail, several yards long. On the back, above the belt, of the man that is playing the drum, you will see a kind of a curved frame or loop projecting upward. This is a stiff "train holder" or "skirt supporter," and was used to hold up the train. When walking, the long folds (you see them on the floor) were tucked in and hung up on the frame. You see the same article of dress projecting from the belt of the man blowing (or rather sucking) the upright flute.

How richly embroidered their coats are! I saw and heard the entire palace band perform in Tokio in 1872. Some of the players were resplendent with gold and silver. Their rich dresses were stiff with silver and gilt embroidery. The common folks in Japan rarely, if ever, see this band, which belongs to the palace only, to tickle the ears of the emperor and nobles. Some of the tunes played are over one thousand years old.

Let us notice the instruments. There is the great upright

drum, with its symbol of long duration of time, signifying the great length of the dynasty of the mikado. It looks like three commas in perpetual motion. It stands just beside the curtain, and is beaten with two padded sticks. On the right is a man playing a hand or horizontal drum. He also calls out the time or sings, hence his mouth is open. Behind is the flute player and the flageolet player. The man on the extreme right has a curious Japanese instrument made of a number of upright bamboo tubes bound together by silver rings, with a silver mouthpiece. Strange to say, he sucks in the air instead of blowing through it.

You perceive the rich flowing sleeves of the men; also the fine railings of the pure white wood called *hinoki* (sun wood), capped with polished copper. Around the large drum are tongues or hooks, signifying flames of fire, painted red. On the border is worked a dragon. These are all symbols of the emperor's presence or power. You see the rich curtains of brocade and the screen of fine bamboo fibres in the centre. Perhaps the mikado is hidden behind it on his throne. Until 1870 the mikado rarely put foot on the earth, and lived behind a screen hidden from the sight of any one but his highest nobles. Some of the country people thought he was a god, and foolishly prayed with their faces toward Kioto.

But Japan has greatly changed of late years. In 1874, when the mikado visited the Imperial University at Tokio, he rode in an open carriage drawn by two American horses. Everybody could see him, and every Japanese child, like a cat, as the proverb says, could "look at a king." As the imperial carriage rolled into the college yard, the palace

band struck up a Japanese tune of welcome. I turned to look at them, and there they stood, not in their old loose robes of red satin and silver and gold, that made them look so large and handsome. Oh no! They were clothed in tight pantaloons, and tight leather boots, and high hats, and black coats and vests, and white neckties. They appeared quite small, like little men, as they were. They suggested to me a double row of black crows with white necks, standing up and fifing and drumming out a shrill hoarse cry. I could almost imagine them about to flap their wings and fly cawing off.

I have not space or time to tell you of Japanese music, which is by no means pleasant to our ears. At the present time the Japanese army and navy brass bands are like ours, and they make just as much noise and usually as much music. In some of the public schools, also, the boys and girls learn to sing according to our scales and notes, and have mastered our tunes. To the ordinary Japanese ears, however, our music is as hideous and unmeaning as theirs is to us. The appreciation of music is almost wholly a matter of education.

Let us all hope and pray and labor to effect the result, that as the Japanese year by year give up their old customs for new ones, they may choose only the good and the better. Many picturesque and beautiful things and customs have they already thrown away, some of them needlessly so. If they could only cast away their wicked and unclean and foul sins and ways and objects, and keep their beautiful customs, how grand and blessed it would be! Such wicked things as idolatry, and lying, and obscenity, and polygamy, and too many other sins with long names or short ones, might be

flung away and forgotten. Thank God! many Japanese are doing it. Hundreds of houses have been cleared of idols and many a home purified since our missionaries went first to Japan. In several scores of places in Japan Christian Japanese now meet to sing hymns of praise to God every Sabbath, not with gorgeous dresses and instruments, as in the picture, but with what is better, earnest hearts and devout voices. May the song swell on!

SCHENECTADY, N. Y.

Children's Work for Children
Vol.3-2, February 1878
pp.28-30

A Japanese Doctor.
By William E. Griffis.

日本の医者

ウィリアム　E. グリフィス

「おはよう、医者さん（*O-hai-o, i-sha-san*）」「ごきげんいかがですか？患者の家をお探しのようですね」。あなたは賢そうに、皮ひもを耳の後ろで縛った大きなメガネを通して周囲をにらみつけている。薬箱を携えた二人の使用人を従えて歩くことに誇りを感じているに違いない。私は今からアメリカの子どもや若者たちにあなたのこと、つまり、あなたがどのように暮らし、どのように治療を施しているかを話したいと思う。

さて、私の若い読者の皆さん、ここは日本のある路上である。舗装はされていない。道の両側に平屋の木造家が並んでいる。どの家も格子造りの紙の窓がある。その医者はこの町で大変重要な人物である。着用しているコートや長くゆったりとした衣服は、誰もが身につけられるものではなく、ごく一部の人に限られたものである。その医者は、高貴な服装、白足袋という白いソックス、草履という皮のサンダルを着用できるばかりではなく、帯刀することも許された特権階級である。しかし、彼は他人を刺し殺したりはしない。少なくとも、その刀を用いては・・・。薬箱を運ぶ二人の使用人が、ぴったりとした細身の半ズボンに藁のサンダルを素足で履いている姿と見比べてほしい。「屋根」のように大きな帽子を被った前側の使用人は油紙を張った傘を持っている。箱は錠剤、貼り薬、粉薬など、無知な人々を畏れさせる数々の薬で満たされていることは間違いない。医者の手にする扇に気付いたであろうか？ 私たちにとって扇というものは夏や暑い日を意味する。ところが日本ではそうではない。扇は装飾品でもあり、使用人に威厳を示す道具としても用い

られている。爽やかな風を創出して顔の周囲を涼しくすることのみに使われるのではないのである。広げた扇を携えている医者のしぐさがいかに堂々としていることか！

禿げ頭の人物が必ずしも賢い頭脳の持ち主であるとは限らない。しかし、この医者（*i-sha*）は両方を持ち合わせているようである。医者は日本語で「イシャ（*i-sha*）」と言い、つまりは、治癒のための知識を有した人物という意味である。私たちは無知で役立たずの医者のことを「イカサマ」と呼ぶが、日本ではそのような医者のことを「藪医者」と言う。なぜならば、たとえその医者が患者に薬を飲ませたとしても、藪の中の竹にそれを注ぐのと同じくらい何の役にも立たないからである。

日本の医者は薬と称して無数の奇妙でナンセンスなものを用いる。その中には、アメリカの医者がはるか昔に役に立たないものとして排除したものも含まれている。日本の医者の多くは専門的な医学教育を受けていない。父親が医者である場合は、その父親の治療の様子を見学し、往診に同行する。それが唯一の教育と言えそうである。しかしながら、彼らの大半は非常に腕がよく、日本人特有の病を見事に治療している。知的で勉強好きな人々が、知識や教育の点で、日本人の先頭に立っている。そして、過去 10 年の間に多くのことが学ばれ、今や欧米式の医学が実践されている。アメリカの医学書数冊が日本語に翻訳され、その中には、フィラデルフィアの偉大な外科医ドクター・グロスの書物も含まれている。現在日本には一流の医学校が数校ある。異教徒の日本人に近づき福音を述べ伝える最良の方法は、体の癒しとの連動である。横浜で活動する優れた宣教医ドクター・J.C. ヘボンは、長年にわたって数千人にも及ぶ貧しい日本人の病を治療してきたのみならず、誠実に福音を述べ伝え続けている。その結果、この親愛なる医師の名前と行いは日本のあらゆる階層の人々から高く評価されている。

年を追うごとに、偉大なる医師である主イエス・キリストのことを知る日本の人々が増えてきた。彼らは罪をあがなわれ、「戻って主を賛美する人々」の群れに加わっている。

A JAPANESE DOCTOR.

By William E. Griffis.

"GOOD morning, Mr. Doctor," (*O-hai-o, i-sha san,*) "how do you do? You are looking for the house of your patient, are you?" As wise as an owl you look, as you glare through your big bone-ribbed spectacles tied behind your ears with a leather cord. You are proud enough, no doubt, that you have such a good practice; that you can afford two servants to follow you and carry your medicine chest! Now I am going to tell our American little folks and young people about you, how you live and heal. Well, my young readers, here is a Japanese street, unpaved, and it has on each side one storied wooden houses, with paper and latticed windows. The doctor is a very important man in the town. That coat and long loose garment cannot be worn by all classes of the people, but only by a few. The doctor is a privileged character, and not only wears noble garments, and white stockings, and leather sandals; but is also allowed a sword in his girdle. He doesn't stab or kill any one, however,—at least not with his sword. Compare the economically tight breeches, and bare legs and feet, and straw sandals of his servants, who carry the medicine chest. See the front man with his big "roof" of a hat, and his oiled paper umbrella. I'll warrant that box contains pills, plasters, powders, and a dreadful array of drugs, that are calculated to awe the ignorant people. Do you see the doctor's fan? With us, a fan means summer and a hot day. Not so in Japan. A fan is an ornament, a tool of authority to make gestures to servants, or to add dignity, as well as to cool the face

by creating a draft of fresh air. See how dignified the doctor looks with his fan held up!

Bald-pates are not always wise-pates, by any means; but I suppose this *i-sha* is both. The Japanese name for physician is *i-sha*, or healing, learned man. We call an ignorant or good for nothing doctor a "quack." The Japanese call such a man a "bamboo doctor," because he pours medicine down people's throats, but does no more good than if he put it into a bamboo cane.

The Japanese doctors use a great many curious and nonsensical things for medicine, and some that our doctors have long since thrown aside as useless. Many of them receive no education, except that of watching their fathers, and following them in their visits of practice. Many of them, however, are very skillful, and successfully treat the diseases peculiar to Japan. Some are intelligent, studious men, and lead the people in knowledge and education. During the last ten years, many have learned, and now practice the American and European systems of medicine. Several of our medical books, especially that of the great Philadelphia surgeon, Dr. Gross, have been translated into Japanese. There are now several first class medical colleges in Japan. One of the best means of preaching the gospel, and of reaching heathen Japanese, is in connection with healing, and our good missionary doctor, J. C. Hepburn, at Yokohama, has not only healed thousands of poor Japanese of their maladies, but has also been a faithful preacher of the gospel for many years. This beloved physician's name and deeds are gratefully appreciated by all classes of the people of Japan.

Year by year, Christ the Great Physician is more and

more known by the people of Japan, and souls sick unto eternal death of sin, are healed, and join the throng of those "who return, giving praises to God."

Children's Work for Children
Vol.3-6, June 1878
pp.86-88

Japanese Pilgrims.
By Rev. William E. Griffis.

日本の巡礼者

ウィリアム　E. グリフィス牧師

日本は徒歩の旅をするのに適した場所の一つである。私がこれまで体験した多くの素晴らしい徒歩旅行は、山々を越え、常緑樹の生い茂る大地の谷間を通り抜けるものであった。私が旅をした際、どのような距離の旅であれ、白い装束を身にまとった巡礼者に会わなかったことは一度もなかった。一人二人のこともあれば、数十人、数百人の集団を目にしたこともある。

日本で巡礼に出ることは良い行いとみなされている。人々は善行によって救われたいと願っているのである。働くことに飽き、勤勉を嫌う怠け者でさえ、しばしば巡礼の旅に出発し、旅をせずに日々懸命に働いている隣人からの大いなる賞賛を得たいがために、偶像を安置した寺社を訪れて将来の安泰を祈り求める。偶像崇拝と怠惰は往々にして同時に起こる。巡礼者の中には真面目で信心深い人もおり、自らのためになると考え、偶像の神を喜ばせたいとの純粋な気持ちから地道に旅を続けている。しかしながら、概して、巡礼者は不潔な怠け者であり、品位を乱す賭けごと好きの哀れな一団である。

挿絵には二種類の巡礼者の姿が描かれている。左側の二人は、腰元にドラムを携え、施しを請いながら、断続的にそれを叩いている。彼らは洗面器を逆さまにしたような大きな帽子を被っている。背中には偶像がいっぱい詰まった一種の戸棚を背負っている。彼らは人々のために祈祷してお金を得る。また彼らは遠方の寺院に吊るすため、祈祷文が記された細長い紙片を持参している。お金の代わりに、魚料理や飯などの食事を供し

て祈ってもらう男女もいるが、挿絵のような人物の大半は詐欺師である。右側の杖を手にしている二人は、地方から徒歩でやって来た者で、地元の聖職者から教えられたある有名な神社を目指している。彼らは腰紐に鈴をつけていて、歩くたびにチリンチリンと鳴る。それはまるで、伝承童謡マザーグースの「バンベリークロス」[5]の歌に登場する白馬に乗った貴婦人のように音楽を道連れにしている。また彼らは扇を携帯し、直射日光や雨を避けるために大きな麦わらの帽子を被り、自分たちの祈りがかなうことを期待して数珠を手にし、しばしば袖口に貝殻を着けている。

しかし、確か日本の詩人の中にも指摘している人がいたが、もし家にいて同じことが十分にできるのならば、なぜ香を焚くためにわざわざ遠くまで出かけて行く必要があろうか？ 旅を楽しみたいと思って出かけるのならば、それはとても良いことであろう。だが、ご利益を期待して出かけることは全くの迷信的な行為である。たとえ聖地パレスチナやゲッセマネに巡礼したとしても、それ自体は私たちをより立派なクリスチャンにするための力にはならないのと同じである。一体いつになったら異教徒たちは断食や巡礼や無意味な修行を通して救済は起こりえないことを学ぶのであろうか？ 救済は、心を新たにし、信仰に基づく生活が神に受け入れられた時にのみ実現するのではないか？

今、日本では、しばしば遠方からも人々がキリストの真の教えを学びたいと宣教師を訪ねて来る。彼らは一種の巡礼者であるが、香を焚いたり、断食をしたり、苦行を実践したりはしない。断片的に耳にしたキリストの話についてもっと知りたいと欲してやって来るのである。と言うのは、日本の多くの地域で聖書の教えを伝えるチラシや冊子が配布されている。また、宣教師の説教に触れた人たちが隣人にその話をすることにより、関心が広まっている。その結果、直接教えに触れたいと望み、横浜や東京へはるばるやって来る人が増えているのである。日本のキリスト教会は、今、蒔かれた種から芽を出したところである。近い将来、「神の戸棚」や「偶像の箱」を背負って徒労の旅をする光景が日本のどこにも見られなくなり、人々が心の中で主をあがめ、彼らが抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えられる日が訪れることを願ってやまない。

JAPANESE PILGRIMS.

By Rev. William E. Griffis.

JAPAN is a good place to make pedestrian trips in, and many a glorious tramp have I had over the mountains and through the valleys of this evergreen land. Scarcely ever have I made a journey of any length in which I have not met from one or two, to scores and hundreds of white-gowned pilgrims.

Going on a pilgrimage is esteemed a good work in Japan, and men like to be saved by good works. Even a lazy, idle fellow, who is tired of work and hates industry, will often start off on a pilgrimage, begging his way to some idol shrine, to get a great reputation among his industrious stay-at-home neighbors. Idols and idleness often go together. Some of the pilgrims are earnest devout men who try to do their duty and mean well, and think they are benefiting their souls and pleasing their idol gods. As a rule, however, the pilgrims are a dirty, lazy, and often obscene and gambling set of wretches.

In the picture are two kinds of pilgrims. Those on the left carry a drum at their waists, and tap it continually, begging as they go. They wear huge hats like wash-bowls turned upside down. They carry on their backs a sort of closet full of idols and images of the gods. They pray for people, getting paid for their prayers, and carry written prayers on slips of paper to distant heathen temples to be hung up there. In lieu of money, they pray for a man or woman for the price of a dinner of cold rice or a slice of fish. They are most of them a lazy set of impostors. Those two on the right are a couple of countrymen who, staff in hand,

are tramping off to some famous shrine of which their priest has told them. They carry bells at their belt, which tinkle as they walk; like the lady on the white horse who rides to Bambury Boss, in Mother Goose's Melodies, the pilgrim has "music wherever he goes." They also carry fans, wear huge straw hats to keep off sun and rain, and have rosaries to count their prayers on, and often wear a shell on their sleeves.

But even as "certain of their own poets have said," if duties are faithfully performed at home, why go afar to burn incense? If these men go for pleasure and travel, well and good, but to go with the idea of religious benefit is superstition indeed. Even a pilgrimage to the Holy Land and to Gethsemane has no power in itself to make us better Christians. When will the heathen learn that salvation cannot be gained by fasting or pilgrimages or works of vain show? That only a renewed heart and a holy life before God is accepted before Him?

Now, in Japan, people from distant parts often come to the missionaries to learn the truths of Christ. They are pilgrims who come not to burn incense or perform fastings and works of penance, but to learn to know more of what they have heard only in fragments of hearsay. For in many parts of Japan leaflets of truth, tracts and Testaments have been carried, or men who have heard the missionaries preach have gone home to tell their neighbors, and some have been so eager to hear more, that they travel to Yokohama or Tokio to hear for themselves. There are now Christian churches in Japan which have sprung up from seeds planted thus. So may the day soon come in all the Japan islands when

men will no longer travel weary leagues with "god closets" or "idol boxes" strapped on their backs, but sanctifying the Lord God in their hearts, they will be ready to give to every one that asketh a reason for the hope that is within them.

Children's Work for Children
Vol.4-1, January 1879
pp.12-14

A Japanese Girl Painting Her Lips.
Rev. W. E. Griffis.

紅をさす日本の少女

W. E. グリフィス牧師

世界のあらゆる場所と同様、日本でもファッションの流儀が幅を利かせている。その流儀いわく「女性が唇や歯に色を塗るのは望ましいことである」と。神が歯の色を白と決め、唇を赤く色づけして以来、すべての人が白と赤のみが口元にふさわしい色であると考えており、また、日本人が言うように「天と地の間の正しい道」を通過するには歯は白く唇はバラ色か朱色でなければならないと人は思うであろう。ところが、ファッションの流儀は「そうではない」と主張する。私たちの国と同じく日本においても、ファッションの流儀は他の考えに対して聞く耳を持たず、道理をわきまえないものである。日本の流儀は第一に、既婚女性と20歳を過ぎた未婚女性のすべてに歯を黒く染めることを命じている。日本の上品な既婚女性の歯の黒さは、石炭の塊に勝るとも劣らないものである。数年前までこれがファッションの法則であった。しかし、思慮深い皇后であるハルコ[6]が歯を白いまま保つ先例を示したことにより、今では地位や影響力のある女性たちの多くは、皇后に倣い、歯を黒く染めずにいる。

10歳から12歳の未婚の少女はアニリン染料のような奇妙な色素を下唇に塗っている。それは緑色を帯びた黄色あるいは銀色っぽい色彩である。日本ではキスはまだ知られていない快楽なので、自ら拭き取るまで落ちる心配はない。

挿絵は外出の支度をしている若い女性の姿である。彼女の左側にある枕に注目してほしい。高さは6インチで、紙製のカバーが掛けられてい

る。彼女は口紅を手にして鏡の前に座している。徐々に彼女は華やかになっていくであろう。花々や金箔紙で飾られた流行のヘアーピンをつけ、額の髪を櫛で止め、顔や首筋、喉下に白粉を叩き、下唇に紅をさし、長くゆるやかな内衣と外衣を羽織る。内側は腰紐、外側は飾り帯で締める。刺繍が施された財布には、手鏡、口紅、紙製のハンカチが入っている。足元は白い足袋を履き、黒く塗られた木板にビロードの紐をつけた履物を用いる。彼女は友人に会うために徒歩で出かけるのであろう。明らかに、彼女の全神経は今や化粧に集中しているようである。徐々にではあっても、彼女の関心が最も崇高な種類の内面の光り輝くものへと向けられるようになること、それは唯一福音を受け入れることによってのみ得られるものであるのだが、そのことを願いつつ彼女の話を終わりにしよう。

A JAPANESE GIRL PAINTING HER LIPS.

REV. W. E. GRIFFIS.

FASHION reigns in Japan as everywhere else in the world, and fashion says that "it is the proper thing to do," for the women to color both lips and teeth. One would think that since God made white the color of the teeth, and tinted the lips red, all would agree that white and red were the only colors proper for the mouth, or, as the Japanese say, "the right way between heaven and earth" requires that the teeth be white and the lips be a rose or vermilion tint. But fashion says "No," and in Japan she is as deaf and unreasonable as in our country. In the first place she commands that all married women, and all maidens past the twentieth year, shall stain their teeth black. No lump of coal could be blacker than a well-bred married lady's teeth in Japan. This was fashion's law for all until a few years ago, when the sensible empress, Haruko, set the example of keeping her teeth white. Now, many ladies of rank and influence do as she does.

Unmarried girls from ten to twenty years old paint their lower lip with a peculiar pigment that looks like aniline dye. It is of a greenish-yellow or golden tint. As kisses are unknown luxuries in Japan, there is no danger of the paint coming off until washed away.

Here is a young lady getting ready for a visit or company. See her pillow on the left. It is six inches high, and has a *paper* pillow-case on. She sits in front of her mirror with the lip-paint in her hand. By and by she will be a gorgeous sight to behold. With the last hair-pin stuck in place, flowers and gilt paper, and "bangs" and combs in position in her hair, face, and neck, and throat powdered, lower lip painted, inner and outer robes put on, inside girdle and outside sash tied, and embroidered pocket-book, with mirror, paint, and paper pocket handkerchief inside, and feet cased in white socks, and black lacquered and velvet-strapped shoes of

wood, she will promenade to visit some friend. Evidently her whole attention is now absorbed in her toilet preparations. Here we leave her, hoping that by and by she may turn her attention to the "inner ornaments" of the noblest sort, which only the gospel furnishes and invites to the taking.

Children's Work for Children
Vol.6-9,September 1881
pp.136-140

Japanese Children and Their Employments.
By WM. Elliot Griffis.

日本の子どもたちとその日常

WM. エリオット グリフィス

日本の子どもたちはどんな暮らしをしているのか？ どんなことを学んでいるのか？ 楽しみは何か？ これらは日本という島国に住んだ経験のある者に対してしばしば発せられる質問である。

まず第一に、子どもたちはたくさん遊ぶ。都会でも田舎でも子どもたちは多くの時間を屋外で過ごす。年長の子どもが幼い子どもを連れて、ともに楽しく遊んでいる。子どもが赤ん坊を背中におぶって遊ぶ姿もよく見かけるが、赤ん坊の足は地面すれすれのところまで垂れ下がっている。それはまるで二切れのサンドイッチが紐で結び付けられているようである。男の子は数種類の駒、大小の凧、鞠、ビー玉、輪、木馬といった遊具を用いて遊ぶ。また、鬼ごっこ、馬とび、相撲といったさまざまなゲームをする。これらのゲームは、私たちの遊びと似ているものもあるが、ほとんどはかなり違う。おもちゃ屋で売られている玩具の大半は珍しく奇妙なものである。ペットとして動物を飼うことは田舎でとても盛んであり、都会でも時折見受けられる。飼われているものは、キツネ、アナグマ、サル、ウサギ、テン，子ジカ、時には子グマのこともある。漁師は魚を捕まえさせるために鵜を訓練する。これらの鵜は船上に止まり、魚を見つけるとそれをめがけて水中に飛び込む。すべての鵜の喉周りには象牙の輪がはめられており、それ故に魚を飲み込むことはできない。鵜たちにやる気を起こさせるために、船頭は魚を取ることができた鵜に餌の褒美を与える。海の近くに住んでいる子どもたちは、蟹や海老や魚を獲るというこの上ない楽しみがある。引き潮の時には、海岸を歩

き、貝殻やさまざまな種類の生き物を砂浜や岩場の穴から見つけ出す。見事な海産物の中でも特筆すべきは、巨大な蟹である。その大きさはハムの塊ほどもあり、はさみを有する腕を広げると全長10から12フィートもの長さにもなる。1、2ヤードの蟹の腕から取れる肉は、8人くらいの家族で食するのに十分な量である。人々が市場から長い物差しのような蟹の腕を携えて家路に向かう姿はよく目にする光景である。しかし、巨大な蟹の本体を持ち歩いているのを見ることはまれである。ドロドロした身体と小さなくぼみがたくさんある数フィートの足をもつイカも時折バケツ一杯獲れる。小ぶりのものは2フィートほどの大きさで、飲食店で頻繁に見かける。人々はそれらの酢漬けや塩漬けを好む。入り江や港には夥しい数のクラゲがいる。たくさんの奇妙な魚が捕獲され、調理される。なぜならば、日本人は肉よりも魚を多く食するからである。食の神はかつて漁師であった。

乾物屋では、マホガニーの木片やチップのように見えるものが売られている。人々はすりおろしてスープに入れるためにそれらを買い求める。驚くことはない。それらは天日干しにした鰹に過ぎないのだから。サメの肉や鯉の生の切り身、そのほか日本人が好むいくつかの魚料理は外国人には楽しめない味である。

山間部では、少年たちは罠を仕掛けて鳥を捕まえ、しばしば小鳥をペットとして飼いならす。その結果、小鳥は見事なほど従順に成長する。長身のコウノトリは大またで野原を歩き回り、松の木に巣を作る。青か白のツルは農夫が集めた虫の後方をもったいぶって歩き、サギは人間によって傷つけられないよう優雅に立ち振る舞う。以前は鴨やガチョウのみが人間の食用のために殺害されていたが、今ではあらゆる種類の鳥が翼の下に1オンスの鉛を抱え込む、あるいは罠や網の餌食となるといった危険に晒されているのである。

さて、日本の少年少女たちが両親の家計を助けるためにどのような仕事をして小銭を稼いでいるかについての話をしよう。日本は貧しい国で、ほとんどの人が一日わずか1ダイムで暮らしている。多くの貧しい労働者は一日の稼ぎが6から10セント足らずであり、その金額で一家を養わねばならないのである。商人の稼ぎはそれより良く、商売が上手くい

けば蓄えもできる。女性や少女は掃除を含め家事全般の仕事をする。少女たちは茶摘みもする。彼女たちの小さくて細い指がその作業に向いているのである。一方、男たちは茶葉を焙じたり、乾燥させる作業に従事する。扇づくりは通常少女たちの仕事である。男たちがまず竹を裂いて持ち手や骨組みを作成する。そして少女たちがそれを折りたたみ、糊付けし、絵の描かれた紙を貼り、縁を整える。陶器製造所では、粘土を混ぜ合わせて練り、茶碗や皿や花瓶を作成し、装飾を施す作業が、時には女性たちによってなされている。刺繍はかつて男性の仕事であったが、今や女性の仕事である。また、綿布を織り、それらを洗ったり蒸したりして布目を密にする作業も女性が担っている。製糸業のほとんどすべては日本の乙女たちの手によって維持されている。彼女たちは、蚕卵が孵化したのを見届けると、若くてお腹をすかせている蚕たちのために桑の葉を摘んで切り刻み、それから藁の梯子を作る。これは孵化後 21 日を経過した蚕が自身の繭を作るために登るものである。そして、若い娘たちは小さな鳩の卵の形をした繭をもぎ取り、熱湯に入れる。その後、水を抜き、光沢のある白い撚り糸にして巻き取り、それらを絹地の織物にする。海に面した地域においては、少女も婦人も素潜りや泳ぎに秀でており、数時間も水中にいることができる。米の生産地では、女性は忙しく働かなくてはならない。膝まで泥水につかり、焼け付くような太陽の下、蚊に刺されないようにするために目の辺りまで厚手の布をまとっている。また、地面に届きそうなほど背中を曲げて鍬入れをし、時には夜明けから星が瞬きだすまで作業を続ける。農家が税を納めた後に家族を養うのは困難である。と言うのは、農業従事者は政府の経費の大半を負わされているからである。

しかしながら、*Children's Work for Children* が創刊されて以来、日本では大きな進歩があった。子どもたちは、たとえ貧しい家庭であっても、学校に通うようになり、日本の外にある世界についてのさまざまなことや世の中の役に立つ善良な人間に成長するために習得しなければならないことを学び始めている。徐々に子どもたちは道端や寺々に溢れている偶像を無視し、崇拝しなくなるであろう。そして、彼らの山や海を作った創造主を崇め、神の子イエス・キリストを通して主を知ろうと努める

に違いない。やがて彼らは、乳母や僧侶らによって教え込まれた作り話や迷信を信じたり恐れたりすることをやめ、アメリカの子どもたちと同様に、日本の子どもたちの造り主でもある神を崇拝し、愛するようになるであろう。

JAPANESE CHILDREN AND THEIR EMPLOYMENTS.

BY WM. ELLIOT GRIFFIS.

THE Japanese children, what do they do? what do they learn? how do they amuse themselves? These are questions often asked of people who have lived in the Japanese islands.

First of all they play. They live much out of doors, both in town and country. The big babies carry the little ones, and both enjoy the fun. Often you may see a child carrying on its back a baby whose feet are just above the ground. One is strapped on the other like two slices of a sandwich. The boys have several kinds of tops, big and little kites, balls, marbles, hoops, and hobby-horses; and play blind man's buff, leap-frog, wrestling, and many games which are something like ours and yet different. In the toy shops most of the toys are strange and curious.

Living pets, which are very common in the country villages and sometimes found in the cities, are foxes, badgers, monkeys, rabbits, martens, young deer, and occasionally a bear cub. The fishermen train cormorants to catch fish out of the water for them. These birds perch on the boat and dive for the fish when they see them in the water. The cormorants wear an ivory ring around their throats so as not to swallow the fish. To encourage them, the boatman gives each successful bird a slice of meat or fish to eat. Boys and girls who live near the sea have fine fun at catching crabs, prawns, lobsters, and fish. At low tide they wade out over the sand, and pick up shells and various living creatures from the beach and holes in the rocks. Among the most wonderful things are the enormous crabs, whose bodies are as large as a ham, and whose claws or arms when spread out measure ten and twelve feet across. A yard or two of crab's arm, full of meat, makes a meal for a family of six or eight persons. It is a common sight to see people walking home from market with a crab's arm as long as a yardstick, but the immense specimens are rarer. Cuttle-fish, with pulpy bodies that fill a bucket, and with cuppy legs several feet long, are occasionally caught. Small ones, measuring two feet long, are familiar sights in the eating-houses. The people like them pickled or soused. Jelly-fishes are very numerous in bays and harbors. Many strange fishes are caught and cooked, for the Japanese eat more fish than flesh. The god of daily food was once a fisherman.

In the dried-fish stores you will see blocks and chips of what looks like mahogany. People come and buy it to grate into their soup. Don't be astonished, for it is only sun-dried *bonito* fish. Shark's flesh, raw slices of carp, and one or two other fishy delicacies liked by Japanese palates, are not enjoyed by foreigners.

In the mountainous parts of the country boys trap and snare the birds,

WRITING A COPY.

SWEEPING AND DUSTING.

and often pet the little ones, training them so that they become wonderfully tame. The tall stork stalks along the fields, and makes his nest in the pine trees. The crane, either blue or white, struts behind the farmer gathering worms, while the snowy heron picks his delicate way along unhurt by boy or man. Formerly only the ducks and geese were slain for food, while the crane and heron were never injured; but now all birds have to take their chances of getting an ounce of lead under their wings or of falling victims to snares and nets.

Let me tell you some of the ways in which boys and girls do work and earn a little money and help their fathers and mothers to support the family. Japan is a poor country, and the people, most of them, have to live cheaply on a dime a day. Many poor laborers earn from six to ten cents a day, and on that they and their families live. Mechanics earn more, and merchants, if successful, lay up a little money. Women and girls do the sweeping and dusting as well as other household duties. Girls pick tea, their tapering fingers being suited for this kind of work, while the men "fire" or dry the leaves. Fans are usually made by girls. The men split the bamboo handles and frames, the girls fold, paste, and put on the painted papers, and trim the edges. In the potteries the clay is mixed and kneaded, and sometimes cups, plates, and vases, are moulded and decorated, by girls or women. Embroidery was formerly men's work, but this is now done by females, who also weave and "full" cotton cloth. Almost all the silk industry is carried on by the daughters of Japan. They see that the silk-worms' eggs are hatched, pick and cut the mulberry leaves for the young and hungry worms, and make the straw "ladders" on which the worm when twenty-one days old climbs to make his cocoon. Then, picking off the little pigeon-egg-shaped cocoons, the young girls put them in hot water, draw off and reel the shining white strands, and weave them into silk patterns. On the sea-coast the girls and women are expert divers and swimmers, and can spend hours in the water. In the rice districts the women and girls have to work very hard. Standing up to the knees in soft mud and water, in the blazing sun, muffled in thick clothing up to the eyes to keep off the biting mosquitoes, they must bend their backs to weed and hoe the rice, often working from dawn to starlight. The farmer has a hard time of it to pay his taxes and support his family, for on the agricultural classes are laid most of the expenses of the government.

Yet, since *Children's Work for Children* was first established, there has been great progress in Japan. Children, even the poorest, go to school, and learn something of the world beyond Japan, and what they ought to know so as to be good and useful. Gradually they will learn to pass by and no longer worship the idols that line every road and crowd every temple. Gradually they will worship the Creator who made their mountains and the sea, and seek to know Him through Jesus Christ His son. Then they will cease to believe in and be frightened at the stories and superstitions taught them by nurses and priests, and will worship and love the Saviour of the Japanese and American children alike.

1 and 2. Beginning and end of H'ya-ku-mono-gatari. 3. Street-children.

Children's Work for Children
Vol.7-3, March 1882
pp.27-28

Naming the Japanese Baby.
William Elliot Griffis.

日本の乳児の命名

ウィリアム　エリオット　グリフィス

私たちが洗礼式において子どもに名前を授ける際、つまりそれは、父と子と聖霊の名のもとに洗礼を施し、その子をクリスチャンとして父なる神にゆだねることを意味する。それによって、神は幼子を腕の中に招き入れてくれるのである。

日本やほとんどの異教国では、子どもに名前を授けることは概して宗教的な儀式であるが、常にそうであるとは言えない。なぜならば、かなりの父親が、僧侶に相談することなく、自ら子どもに名前をつけているからである。日本の男子は通常、父親の名前の一音を受け継いでいる。例えば、父親が「ヒデモト」という名前であったならば、長男は「ヒデアキ」、次男は「ヒデツグ」、三男は「ヒデノブ」といった具合である。あるいは父親が「サヘイ」であったならば、息子は「サタロウ」や「サブロウ」と名づけられるであろう。日本では、男の子の名前は特定の際立った意味を持たないが、女の子の名前が非常に愛らしい。私は東京あるいは福井に居住する何人もの「小雀（Little Sparrow）」、「小竹（Little Bamboo）」、「金（Gold）」、「銀（Silver）」、「波（Wave）」、「星（Star）」、「花（Flower）」、「真珠（Pearl）」、「咲（Blossom）」、「桃（Pink）」、「藍（Blue）」、「白（White）」、「紅（Red）」という名前の少女を知っている。

庶民の大半は、生後33日目に母親が赤ん坊を寺院に連れて行く。祖母や叔母、姉または乳母が付き添い、父親あるいは叔父、時には両者が同行することもしばしばある。掲載の挿絵では、乳母が乳児を抱き、婦人はその後ろに立っている。おそらく雨天の日のようである。なぜなら、

乳母は木靴を履いており、これは泥濘(ぬかるみ)から足元を高く保つための履物であり、婦人は傘を携えている。乳児は木綿あるいは絹で作られた綿入れの特別なキルトに包まれている。木綿か絹かはその家庭の豊かさによって異なる。乳母は絹糸で花柄の刺繍が施された帯を締めている。寺院の正面に大きな門口があり、大梁の真ん中には寺の名前を記した板が掲げられている。縮緬(ちりめん)の長くゆるやかな外衣で正装し、サンダルを履き、頭皮が輝くまで髪を剃りあげた僧侶が、訪問者を出迎えている。特定の地位にある僧侶は、小さな馬の尻尾のようなものが結び付けられた棒を持っている。これはハエを追い払うためのブラシではなく、儀式のしるしである。子どもへの命名は容易に完了する。ある場所では、候補の3つの名前を書いた紙を空中に投げ上げ、最初に地面に落ちた紙に書かれた名前が選ばれる。続いて、聖典より抜き出した言葉や文章の一節を書き記し、それを名前の紙に包んで母親が持っている固そうな小さいバッグに入れる。これは日本の乳児が皆腰のあたりに身につけるものである。寺院の屋根の端には小さな鐘があり、風に吹かれてチリンチリンと鳴っている。右側には噴水と銅製の水槽があるが、これは参拝者が通常お参りをする前にまず手を洗う場所である。水槽の前にある文字が刻まれた石は、おそらく噴水の寄贈者の名前が記されているのであろう。

ここまで、異教徒の子どもの命名について話してきたが、昨年は多くの日本の乳児や子どもがキリスト教会において、聖水による洗礼を受け、クリスチャンとなった。やがては、何百万という日本の子どもたちが洗礼を受け、聖なる暮しの中で救い主の小さきものとなっていくであろう。

NAMING THE JAPANESE BABY.

WHEN we give a name to a child in baptism we christen it, that is, we Christ-en it and baptize it in the name of the Father and the Son and the Holy Ghost, dedicating it to Him who invited little children to His arms.

In Japan and in most heathen countries the giving of a name to a child is usually a religious ceremony, though not always, for there are not a few fathers who will not have anything to do with the priests, and so name their children themselves. Sons in Japan usually receive one syllable of their father's name. Thus Mr. Hidemoto will call his first son Hide-aki, his second Hide-tsugu, his third Hide-nobu, etc. Or if his name is Sahei, he will have Sa-taro, Saburo, etc. Boys' names have no particular or striking meaning, but girls' names are very pretty. I knew several Little Sparrows, Little Bamboos, several Golds, Silvers, Waves, Stars, Flowers, Pearls, Blossoms, Pinks, Blues, Whites and Reds who lived in Tokio or Fukui.

Among most of the common people the mother takes the baby to the temple on the thirty-third day to be named. Along with her go grandmother, aunties, sisters or the nurses, and often the father or an uncle or two. In the picture the nurse holds the baby, and the lady stands behind. It is perhaps a rainy day, for the nurse has on her clogs, which raise the feet above the mud, and the lady has her umbrella with her. The baby is held in a special kind of padded quilt, made of cotton or silk according to the riches of the family, and nurse has tied on her best girdle, which is embroidered with silk flowers. The great gateway in front of the temple has a tablet in the middle of the cross-beam, on which is the name of the temple. The priest, arrayed in his long crape robes, with sandals on his feet, and head shaved till it shines, comes out to meet the party. Those of a certain rank carry a stick, on which something like a small horse-tail is fastened. This, however, is not a fly-

brush, but a mark of office. The naming of the child is easily accomplished. In some places three names are selected, and cast up in the air. The first one which falls to the ground is the name selected. Then writing out some word or passage from the sacred books, it is with the name wrapped up and put into the stiff little bag which the mother holds in her hands, and which all Japanese babies wear at the waist. At the ends of the temple roofs are little bells, which tinkle in the breeze, and to the right is a fountain of water and copper tank, in which worshippers usually first wash their hands before going to pray. The inscribed stone in front may contain the name of the giver of the fountain.

So far we have spoken of heathen naming of children. Last year many scores of little Japanese babes and children were christened with the waters of holy baptism in Christian churches. Soon may millions of the children of Japan be the Saviour's little ones in baptism and holy living.

WILLIAM ELLIOT GRIFFIS.

Children's Work for Children
Vol.7-9, September 1882
pp.138-139

A Japanese Curiosity Shop.
By William Elliot Griffis.

日本の骨董店

ウィリアム　エリオット　グリフィス

日本のような歴史のある国では、私たちが家具といった大きな品物を好む以上に、彼らは小さな飾り物や骨董品、珍品を好み、それらを売る多くの骨董店が存在する。挿絵に示したのもその一つで、まさに路上に店を開いている。折り戸はすべて後ろに押しやり、店主はお客が値段を尋ねるのを聞いている。彼は紙製のはたきで商品の埃を掃っているが、そのはたきは自家製のハエ取りブラシのように見える。彼は一歩前に踏み出し、敷居の端に立って客を招き入れようとしている。その間、別の男女の客が背後にある木彫りを品定めしている。

日本のほとんどの店では、床には畳のマットが敷かれているが、この商人は床を板敷きにしているので、室内でも草履を履いたままである。通常、日本人は厚手の底を持つ木綿のソックスを履いて室内を歩き回る。下駄や草履や靴は外の敷居の下に置かれている。

実用的なもののみならず、多種多様な美術品があるのが見えるであろう。左側には銅製の香炉がある。ふたの上には、尻尾を巻き上げている子狐が置かれている。日本人は甘いにおいのするお香を室内で焚くのが好きである。寺院では、神に向かってそれらを焚く。香りのある棒をもやすこれらは、アメリカ人が「線香」と呼ぶものである。いつも銅製の壷は彫刻が施された木製の台座の上に乗せられている。床には火鉢（*hibachi*）つまりは火を入れる鉢があるが、この中で炭を燃やし、暖を取り、茶のための湯を沸かすのである。

男性の右側の箱の上にあるのは、鎧一具である。昔、兵士はヘルメッ

ト――カブト虫あるいは雄牛のような角がある――を被り、胸当てと脚絆を紐で身体に締め付けていた。鎧は鉄の薄い板でできており、絹で結び合わされていた。肩の部分は非常に厚手になっている。それは刀の貫通を防ぐためである。平穏時には、鎧は箱に入れて保管される。その箱が、挿絵の鎧の下の箱である。鎧を身に着けると、武士は甲羅をまとった亀になったような気分に違いない。挿絵から、そのほかに提灯、金襴、刀、旗、彫像、偶像などが店先に置かれているのが分かる。

美しく華やかで物珍しいものを制作することができる日本人が、なぜこのようなガラクタを拝み、敬愛さえするのかと奇異に思われるかもしれない。だが、精巧な家屋や衣類を作ること、あるいは学校教育、芸術、技能といったものであっても、魂の啓発にはならないのである。かつて人間の肉を食していたニュージーランドの部族でさえ、彫刻や装飾品を作ることは得意であった。

「日出づるところ」（日本を意味する言葉）の多くの家庭において、今「香と清き捧げ物」が主なる神を賛美している。香は天の父なる神への祈りであり、清き捧げ物はキリストの恩寵により安らいだ心から差し出されたものである。古寺やクリスチャンとなった家庭から出された多くの香炉が、廃棄された偶像と同様に、骨董店でガラクタとして売られており、簡単に手に入れることができる。骨董店でそれらを見かけるほうが、人々がそれらに頭を下げているのを見るよりも、はるかに好ましい。

A JAPANESE CURIOSITY SHOP.

BY WILLIAM ELLIOT GRIFFIS.

In an old country like Japan, where the people are even more fond of ornaments and knick-knacks and bric-a-brac than we are of our big articles of furniture, there are many shops for the sale of curiosities. Here is one in the picture, which opens right on the street. The folding-doors have all been pushed back, and the shopkeeper hears customers inquiring his prices. He has been dusting his wares by means of the paper duster, which looks like a home-made fly-brush. He steps forward and stands on the edge of his threshold, inviting the visitors to come in. Meanwhile two other customers, a gentleman and a lady, are examining a wooden carving in the rear of the store.

Unlike most Japanese shops, which are floored with matting, this merchant has a floor of hard wood, and so keeps on his sandals indoors. Usually Japanese go about the house in their thick-soled cotton socks; clogs, sandals and shoes are laid outside, below the threshold.

See what a variety of objects of fine art, besides useful articles, there is. On the left is an incense-burner of bronze; on the lid is a little fox with curled tail in the air. The Japanese are fond of burning sweet-smelling perfumes in their houses. In the temples they burn them to their gods. Americans call these smouldering sticks of incense "joss-sticks." As usual, the bronze vase is set on a stand of carved wood. Down on the floor is a *hibachi* or fire-bowl, on which charcoal is burned for warmth, or to boil the water for tea.

On the box to the right of the man is a suit of armor. In old days the soldiers put on the helmet—horned like a beetle or an ox—and laced on the cuirass and leggings. The armor was made of thin plates of iron laced together with silk. The shoulder-pieces were very thick, so as to resist a sword-cut. In time of peace it was packed into the box on which it stands. With armor on, a warrior must have felt like a turtle in his shell. All around are lanterns, brocades, swords, flags, drums, images and idols.

It may seem strange that people like the Japanese, who make such pretty, gay and curious things, should worship or even honor such trash; yet fine houses or clothes, or even education or art or skill, do not enlighten the soul. Even the New Zealand cannibals, who once ate human flesh, were very fond of carving and decorative art.

"The incense and a pure offering" which now rises to God in many a home of "the rising of the sun" (as the word *Japan* means) is the incense of prayer to our Father in heaven, and the pure offering of hearts softened by the grace of Jesus. Many an incense-burner from old temples and from homes now made Christian, as well as many a cast-off idol, reaches us as bric-a-brac. Among our curiosities it finds a better place than when human beings bow down before it.

＜訳者注＞

1　本州を本土（日本）と記しているのはグリフィスの誤りではない。外国人による幕末・明治期の日本見聞記あるいは日本地理に関する書籍の多くが本州を「ニッポン」と表記している。これは、江戸時代に長崎出島のオランダ商館付医師として来日したケンペルやシーボルトの記録に由来していると考えられる。（齋藤元子『女性宣教師の日本探訪記　－明治期における米国メソジスト教会の海外伝道－』2009 年，新教出版社，pp.63-65.）

2　イズラエル・パットナム（Israel Putnam）アメリカ独立戦争中の大陸軍将軍

3　Peter Parley 米国児童文学作家サミュエル・グッドリッチ（Samuel Griswold Goodrich）のペンネーム。*Peter Parley's Universal History* は明治期にアメリカ人宣教師により設立された複数の学校で万国史の教科書として用いられていた。

4　1876 年にフィラデルフィアで開催

5　グリフィスは“Bambury Boss”と記しているが、正しくは“Banbury Cross”。

Ride a cock horse to Banbury Cross
（駄馬に乗ってバンベリークロスへ行こう）
To see a fine lady upon a white horse
（白馬に乗った貴婦人に会いに）
With rings on her fingers and bells on her toes
（彼女の指にはリング、つま先には鈴）
She shall have music wherever she goes
（常に音楽が道連れだ）

6　昭憲皇太后　旧名一条美子（はるこ）

明治学院歴史資料館資料集　第10集②

2016年3月31日　発行

編集代表　長谷川　一
発 行 者　小暮　修也
発 行 所　明治学院歴史資料館
東京都港区白金台1-2-37
電話　03-5421-5170
印 刷 所　河北印刷株式会社
東京都千代田区神田北乗物町1-1
イトーピア神田共同ビル2階